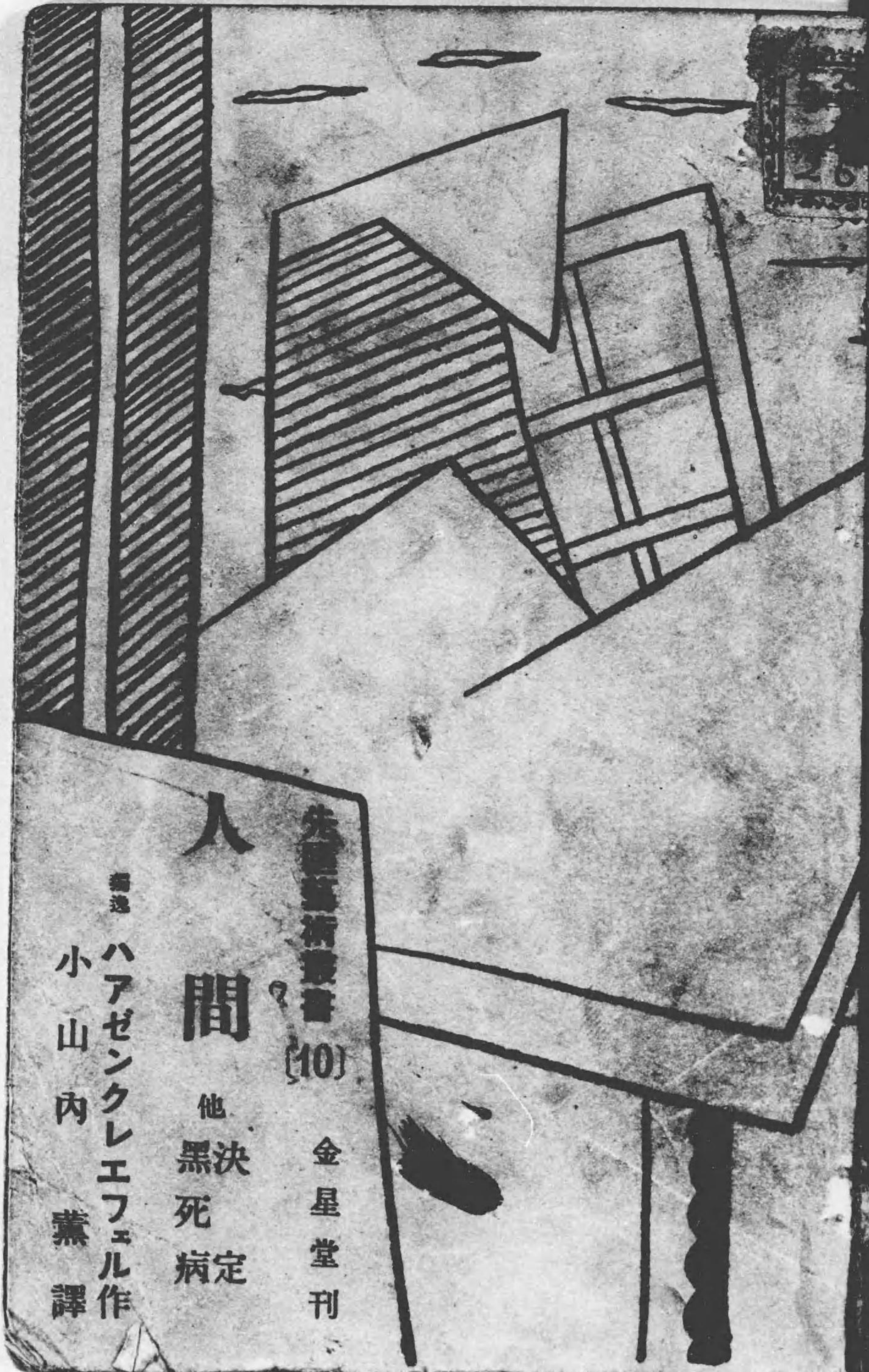


539
26



始





先哲藝術叢書

(10)

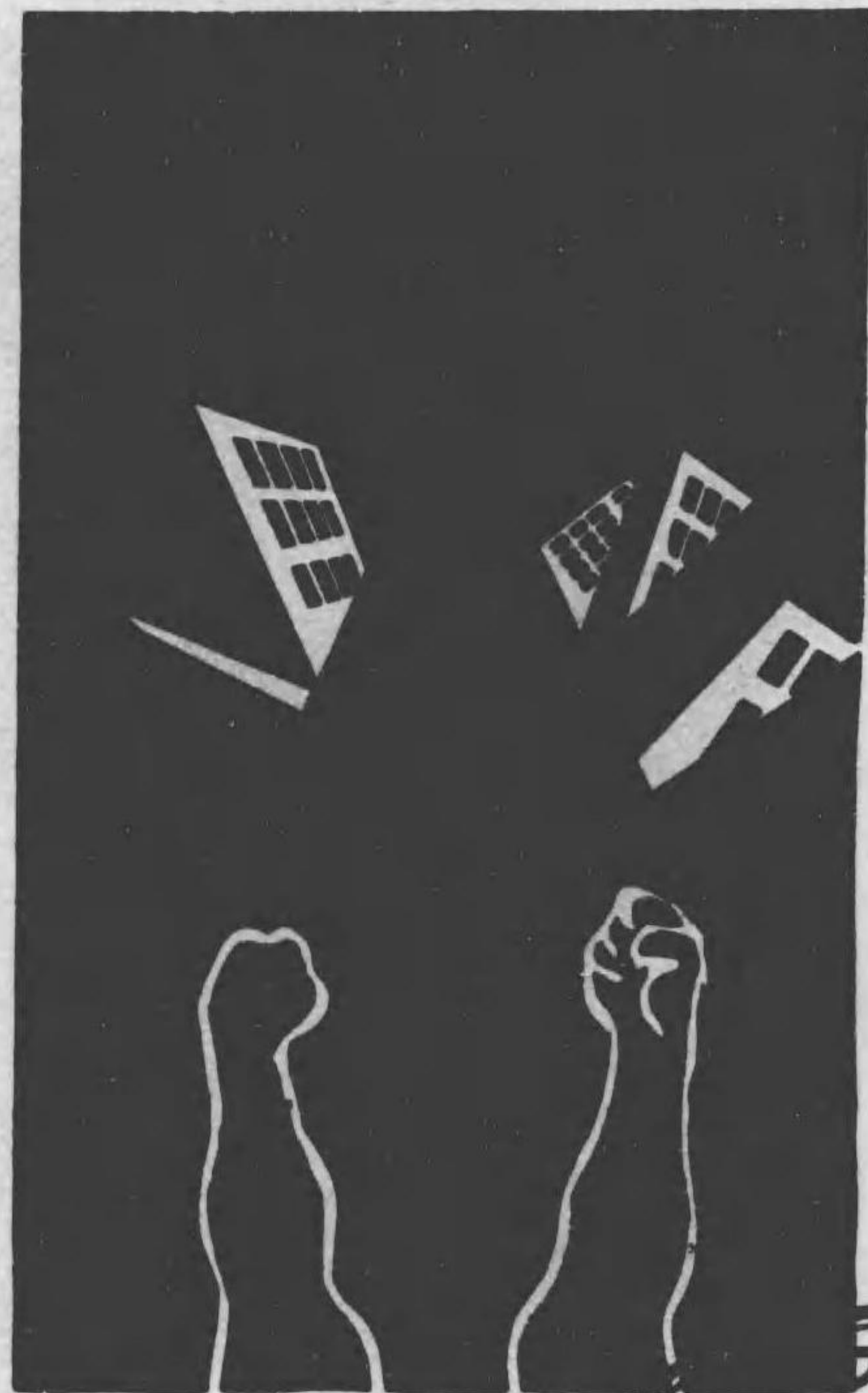
金星堂刊

人間

他 決死病定

編者 ハアゼンクレエフェル作
小山内 薫 譯

人間
 曲 戯 派 現 表
 (編 二 他)
 作 者 ルーフェンゼン
 脚 本 素 内 山 小
 (10)



大 正

1925

14 6. 23

版 出 ・ 堂 星 金 ・ 東 京 内 交



James Hasenolter

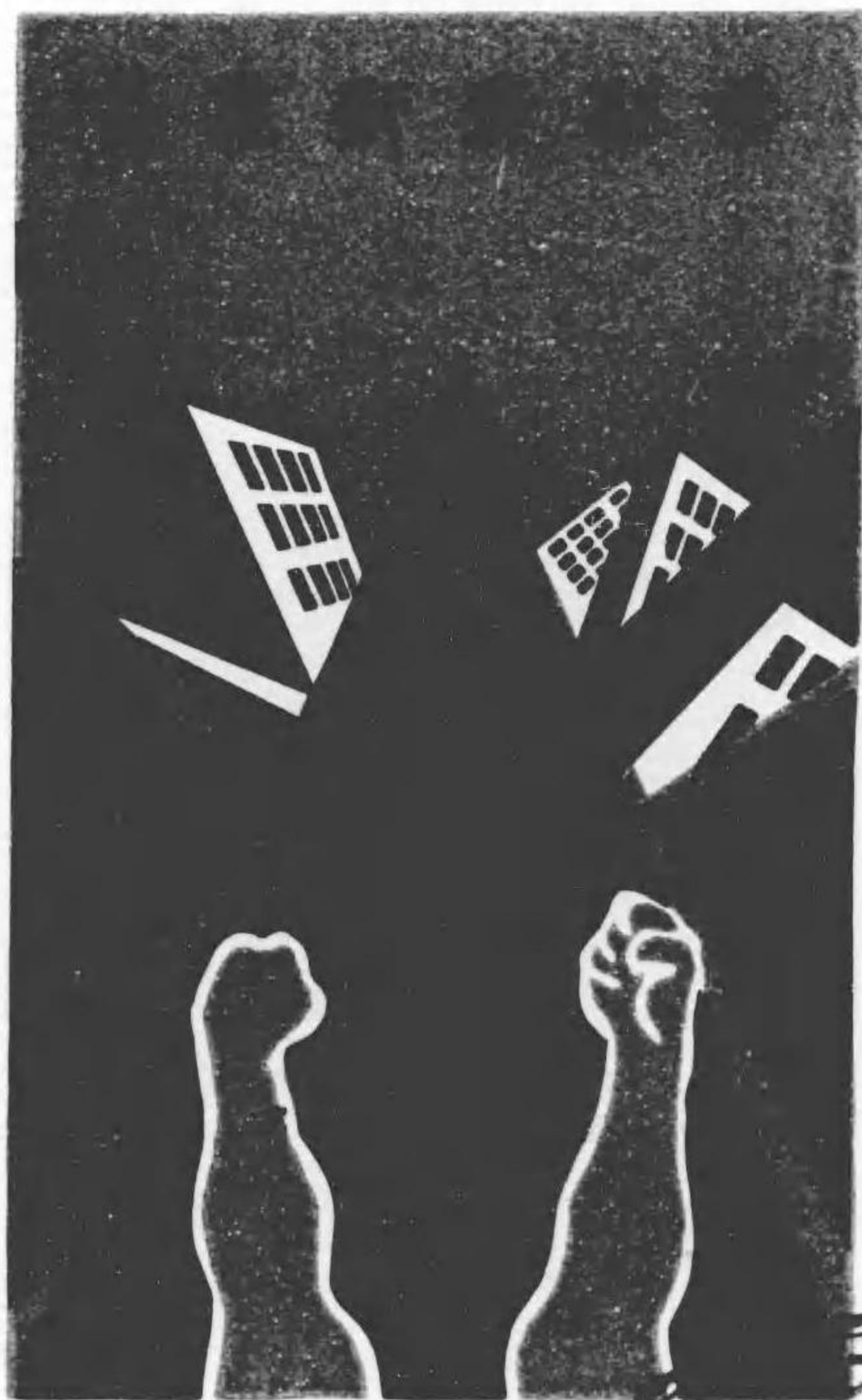
曲戲派現表

人間

(編二他)

作ルェフエレクンゼアハ
譯 薰 内山小

[10]

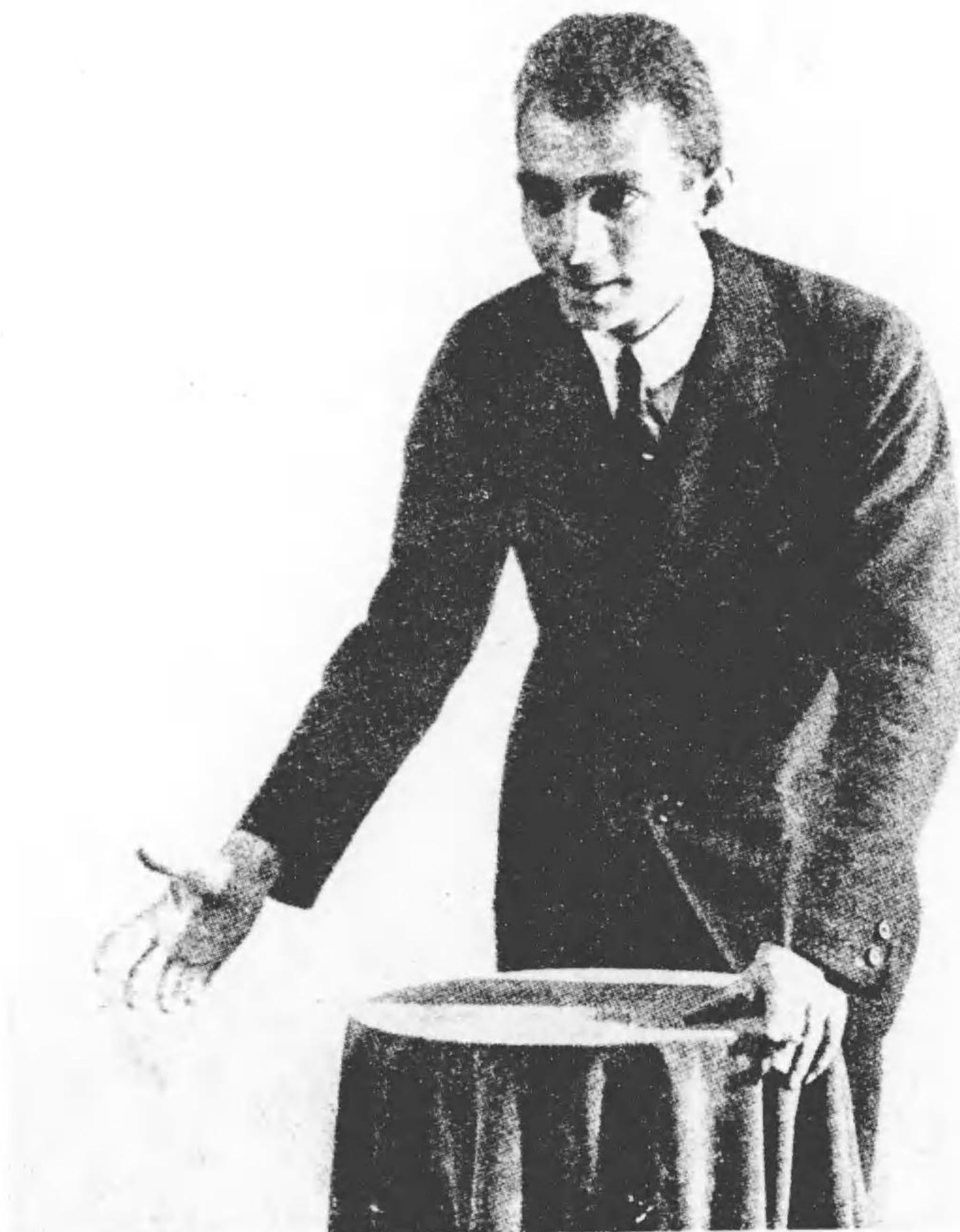


大正

1925

14.6.23

版出・堂星金・京東内交

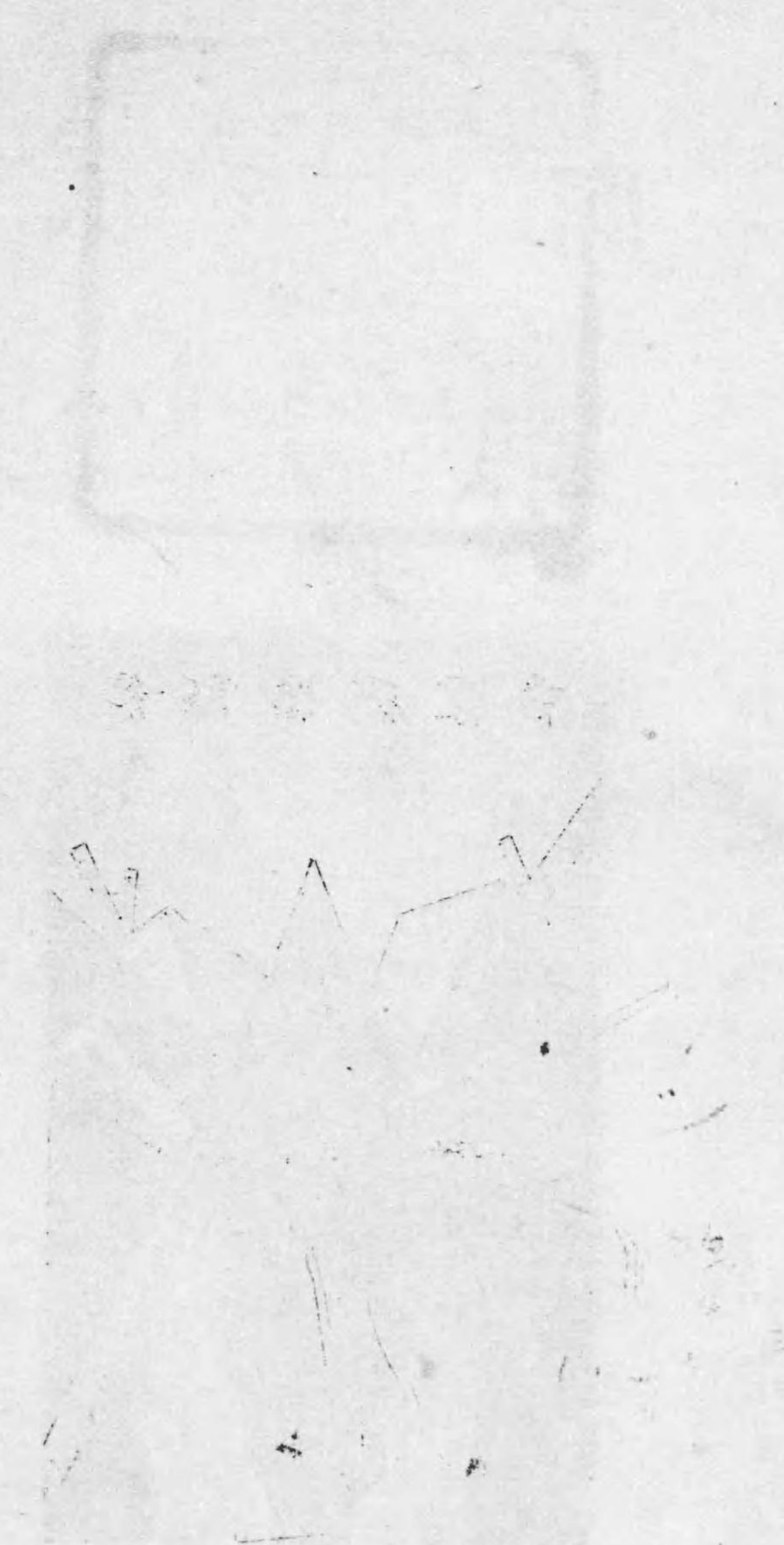


James Hasenolter

339-26

目次

人	間	一	
決	定	三	
黒	死	病(五巻の映畫劇)	七
「人間」の解説	二七	



人

間

(Walter Hasenclever)

人

間

(五幕の表現派戯曲)

第一幕



第一場

墓地。

夕焼。或十字架が倒れる。

アレクサンダア。(墓の中から出て来る)

人殺し。(袋を持って出て来る)

アレクサンダア。(驚く)

人殺し。おれは人を殺した。(袋をアレクサンダアに渡す)

アレクサンダア。(手を出す)

人殺し。首は袋の中にはひつてゐる。(墓のところへ行つて、その中へはひる)

アレクサンダア。(その上へ土をかける)

風一陣。

寺の禮拜堂が明かるくなる。

青年と少女。

青年。誰だ。

少女。死骸よ。(氣絶する)

青年。人殺し。

アレクサンダア。君の外套を。

青年。(肩から引廻しの外套を取る)

アレクサンダア。(それを纏ふ)

青年。君は誰だ。

アレクサンダア。おれは生きてゐる。(袋を肩にかけて、行つてしまふ)

少女。(息を吹つ返す)

青年。(少女を抱く)

少女。(叫ぶ) あたし、あなたを欺してゐましたわ。

第二場

廣間。

夜布のかかつた卓。うしろに帷。右と左に壁の凹んだ所がある。

廣間が明かるくなる。

年をとつた給仕人と客。

給仕人。(新聞を讀んでゐる) 人殺しだ。

客。(熱心に) 足か。

給仕人。首がないのです。

客。ビールを一杯。

アレクサンダア。(袋を持つて、帷を潜つてはひつて来る)

客。強盗か。

給仕人。 酬いです。

客。 勘定。

給仕人。 ロオストビイフが一つと。

客。 やられた人間は一人か。

給仕人。 三マアクと九十ブヘニツヒ。

客。 (出て行く)

アレクサンダア。 皆さん。

給仕人。 アレクサンダア。

アレクサンダア。 ここは何處だ。

給仕人。 行方が知れなかつたのだ。

第三場

右手の壁の凹んだ所が明かるくなる。

ぼろぼろな装をした人間が、酒の瓶が澤山載つてゐる卓の前に坐つてゐる。

酒飲み。 おれは夢を見てゐる。

廣間が暗くなる。

アレクサンダア。 (はひつて来る)

酒飲み。 (アレクサンダアに杯を差す)

アレクサンダア。 (飲む)

酒飲み。 君は腹が減つてゐるな。

アレクサンダア。 (見上げる)

酒飲み。 兄弟。 (アレクサンダアを抱く)

亭主。 (はひつて来る) お金を頂きます。

酒飲み。 (上着の中を探す)

亭主。 六本です。

アレクサンダア。 おれが働かう。

亭主。 給仕人になつてか。 (廣間を指さす。やがて出て行く)

リッシ。(はひつて来る) 皆さん。
 酒飲み。お前は病氣だ。
 リッシ。髻をとつてやるから。(去る)
 アレクサンダア。(腕を伸ばす) 可愛い奴。

第四場

左手の壁の凹んだ所が明かるくなる。

燕尾服を着た紳士達が一つの卓を囲んで立つ。
 賭博場の首領。貸元。助手。

聲。(姿は見えない) 始めるぞ。
 紳士達。(卓の上へ金を投げ出す)

右手の壇の凹んだ所が暗くなる。

アレクサンダア。(はひつて来る)

貸元。誰だ。

助手。死骸だ。

一同、叫び且笑ふ。

貸元。(アレクサンダアに金をくれる) 坐り給へ。

アレクサンダア。(坐る)

聲。十三。

貸元。萬歳。

助手。うまくやつたな。

紳士達。うつちやつて置け。

聲。十三。

貸元。畜生。

紳士達。爲方がないさ。

貸元。(卓の上に金を投げ出す)

聲。 十三。

紳士達。 商業参事員閣下。

貸元。 これでみんなだ。(金を卓の上に投げ出す)

聲。 十三。

首領。 愈銀行か。

貸元。 やるぞ。

聲。 十三。

騒擾。

貸元。(カラアを引きちぎる)

紳士達。 破産だ。

貸元。 時計だ。(時計を卓の上へ投げ出す)

紳士達。 遺言状だ。

静寂。

貸元。(拳を振る)

首領。(鐘を鳴らす)

覆面の人々。(はひつて来る)

貸元。(叫ぶ) もう、おしまひだ。

覆面の人々。(落し戸を明けて、その中へ貸元を押し入れる)

首領。 これでやめにします。

卓が見えて来る。

フレクサンダア。(金の前に立つ)

紳士達。(嚇すやうに) うつちやつて置け。

重く沈んだ銃聲。

助手。(十字を切る)

覆面の人々。(踊つて来る)

紳士達。(卓の上の金を分ける)

首領。 始めた。

紳士達。(痙攣状態になる)

聲。十三。

卓が引つくり返る。

覆面の人々。(紙幣を拾つて、アレクサンダアの衣兜へ押し込む)

アレクサンダア。(去る)

叫び聲。うまく行つたぞ。

紳士達。(ピストルを出す)

叫び聲。報酬の強要だ。

首領。(肩を聳かす)

紳士達。吾々は餓死する。

助手。(電燈を消す)

満月。

助手。(月を指さす) 鑛山だ。

叫び聲。運河だ。

紳士達。證書だ。

叫び聲。金だ。

助手。(電燈をつける) 月の銀行だ。

首領。もう締まつてしまった。

叫び聲。署名だ。

紳士達。(書く。紙が飛ぶ)

助手。取締役。(書附を首領に渡す)

叫び聲。慈善家。

紳士達。(首領を祝ふ)

リッシ。(はひつて来る)

紳士達。(卓を起す)

助手。(杯を舉げる)

聲。始めるぞ。

紳士達。(卓の上へ證書を投げ出す)

左手の壁の凹んだ所が暗くなる。

第五場

廣間が明かるくなる。

朝。卓の上の布が取り除けられてゐる。帷が開かれてゐる。
うしろに工場が影繪のやうに見える。

酒飲み。(ひとりで) おれは世界を愛す。

職工達。(はひつて来る)

酒飲み。朋輩。

職工達。賃銀値上げだ。

酒飲み。朝が来るよ。

職工達。朝の新聞か。

アレクサンダア。(給仕人になつて出て来る)

職工達。ストライキだ。

酒飲み。吾々は貧乏だ。

アレクサンダア。(珈琲を持つて来る)

酒飲み。六本だ。

アレクサンダア。(考へて、紙幣を取り出す) これは君のだ。(前掛を棄てて出て行く)

職工達。金持になつたな。

酒飲み。地獄だ。

職工達。こつちへよこせ。

酒飲み。(紙幣を隠す)

職工達。よこさねえか。(酒飲みを血の出るまでなぐりつける)

酒飲み。(昏倒する。工場の汽笛が鳴る)

職工達。(爲事に出て行く)

リッシ。(紳士達と出て来て酒飲みに蹲く)

年とつた^{おれ}人。(酒飲みを抱き起す)

アレクサンダア。(袋を持って出て来る)
給仕人。お前、生きてゐるのか。
アレクサンダア。おれは何だ。

第二幕

第一場

地下室。

地下室の上に部屋が一つある。うしろに窓、往來。

地下室が明かるくなる。

酒飲み。(頭に繻帯をしてゐる) 金だ。

乞食。(窓から手を出して) パンを下さい。

賭博場の助手。(はひつて来る)

乞食。(姿を消す)

酒飲み。まだ血が出る。

助手。署名をして下さい。(書類を擴げる)

酒飲み。財産はもう一文もないのか。

助手。共産になりました。

酒飲み。もう戦争はないのか。

助手。平和になりました。

酒飲み。(助手の手を掴む) 將來は。

助手。株式です。

酒飲み。人間は。

助手。奴隷です。

酒飲み。(手を咬む)

助手。財産はもう一文もないのです。

酒飲み。共産か。

助手。もう戦争はないのです。

酒飲み。平和か。(ハンケチを落とす)

助手。(身を屈める。手を酒飲みの喉にかける) あなたのハンケチです。(絞める)

娼婦達。(窓のところに立つてゐる) 金持の宮様。(くすくす笑ふ)

助手。(手を放す)

娼婦達。(はひつて来る。テア。ギルダ。レナ)

助手。(窓から飛び出す)

テア。奥様に御挨拶をおしよ。

ギルダ。(酒飲みの上著を見て) ぼろぼろだわ。

レナ。お前、糸を持つてゐるかい。

テア。(鏡の前で) あたしの帽子は似合ふかい。

酒飲み。おれは死にさうだ。

ギルダ。煙草をおくれよ。

テア。藤色絹だよ。

レナ。金持の宮様。神様のお話をおくれよ。(みんな酒飲み of 廻りに横になる)

酒飲み。神様は何百萬も相続するのだ。

ギルダ。忿張りだねえ。

テア。中々細かいんだよ。

レナ。(酒飲みの上著を縫ふ)

酒飲み。それがおれ達を振り曲げるのだ。(のけさまに倒れる。女達がその上に何か掛けてやる。それから、そつと立ち去る)

ギルダ。神様は何百萬も相続するのかい。

酒飲み。(ひとり) おれは死を待つてゐる。

地下室が暗くなる。

第二場

上の部屋が明かるくなる。

青年と少女。

少女。 あたし心配だわ。

青年。 (立ちあがる)

少女。 段々近づいて来るわ。

青年。 (戸口へ行く)

少女。 何か始まつてよ。

青年。 (戸口を開く)

少女。 今よ。

下で椅子が一つ倒れる。

少女。 (叫ぶ) 誰か死んだんだわ。

青年。 (下へ駆け降りる)

少女。 (腰をぬかす)

青年。 (踊つて来る。紙幣を手に持つてゐる) 金だ。

少女。 (驚く)

青年。 あいつは死んでゐた。

少女。 あなた、震へてゐるのね。

青年。 (窓を大きく明けて) 生活だ。

少女。 あなたあたしを愛してゐないんだわ。

第三場

女卜者の家。

長椅子。その前に卓。三箇の椅子、卓を圍む。長椅子に女卜者。それに對して少女。その左手に青年。右手の椅子が一つ明いてゐる。

青年。(骨牌をまぜる)

女卜者。お嬢さんは青い顔をしてゐるね。

青年。(骨牌を切る)

女卜者。わしも昔は若いことがあつた。(骨牌を手の内に取り)

青年。(骨牌を四枚抜く)

女卜者。(それを明けて見る)

お前を覆ふものは——一つの心だ。

お前を恐れさせるものは——一人の女だ。

お前の頭にあるものは——幸福だ。

お前の足にあるものは——死だ——

もう一遍まぜて御覽。

青年。(もう一度まぜる)

女卜者。(總ての骨牌を明けて見る。首を振る) 富だ。(一つ一つの骨牌を指さす) 一人の女

が——やつて来る——お前がその女に惚れる——涙だ——

リツシ。(はひつて来る。誰もそれに気がつかない。明いてゐる椅子に腰をかける)

女卜者。醫者に氣を付けなければいけないよ。

少女と女卜者が暗くなる。青年とリツシが明かるい儘でゐる。二人が骨牌を見る。

女卜者。女が来る——お前は女を知らない——黒札だ——危険だ——病氣だ——

二人に當たつてゐる光が消える。

女卜者の聲。死だ。

青年とリツシが顔を見合ふ。

第 四 場

應接間。

うしろに戸口。右と左に小さい部屋がある。

左の小さい部屋が明かるくなる。

青年。(はひつて来る)

聲。(外で) ドクトルは御在宅です。

青年。(繪の前に立つ) 『カナの婚宴』か。(自分の體に指を觸れて) 腺が膨れてゐるのだ。

(不安に歩き廻る。時計を出して見る) 六時半だ。(震へる) おれは健康だ。(突然。胸を掴む) もう決して戀はしない——決して子供は作らない——

應接間が明かるくなる。

青年。危険だ——病氣だ——

醫者。(應接間へはひつて来る)

青年。死だ。

醫者。(左の小さい部屋を明ける)

青年。(胸をひろげる)

醫者。(プレパララムを取る)

青年。(壁を見詰める)

醫者。(顕微鏡の方へ行く)

青年。舟だ。子供だ。

醫者。いつ生まれました。

青年。城だ。

醫者。お父さんは健康ですか。

青年。(窓の方へよろめく) 生活だ。

醫者。ちと疑はしい點がある。

青年。僕は聲が出ません。

醫者。(立ち上がつて) ママアク。

青年。 便が結します。

醫者。 微毒だ。

青年。 (氣絶する)

醫者。 (青年を左の小さい部屋へ擔いで行つて、長椅子に寝かす)

右の小さい部屋が明かるくなる。

少女。 (はひつて来る)

醫者。 (應接間へ歸つて来る。手を洗ふ。右の小さい部屋を明ける)

少女。 (醫者の前に跪く)

醫者。 妊娠だな。

少女。 助けて下さい。

醫者。 綺麗な娘さんだ。

少女。 困つてゐるのです。

醫者。 刑事問題だ。

少女。 (立ち上がる) あたしを救つて下さい。

醫者。 キスをさせろ。(少女を抱く)

少女。 (前へ倒れる) 倒れます。

醫者。 (少女を右の小さい部屋へ擔いで行く。燈を消す)

右の小さい部屋が暗くなる。

青年。 (長椅子の上で、息を吹つ返す)

落日。

青年。 (腕をひろげる) 朝日だ。

左の小さい部屋が暗くなる。

少女。(髪のを振り亂して、右の小さい部屋から應接間へ飛び込んで来る。解剖刀を握む。

血管を切る。戸口が明く)

アレクサンダア。(袋を持つて、はひつて来る)

少女。(刀を落とす)

アレクサンダア。(少女の手を取つて、血を吸ふ)

應接間が暗くなる。

アレクサンダア。(左の小さい部屋を明ける)

月光。

青年。(床の上に横たはる)

アレクサンダア。(青年に手を觸れる)

少女。(近寄る)

青年。(立ち上がる。骸骨である。髑髏である)

アレクサンダア。(青年の手を取る。一緒に出て行く)

第五場

オペラの劇場。

幕の中の棧敷。胸壁の帷が引いてある。右手の棧敷には人がゐない。アレクサンダアと青年と少女が安樂椅子にかけてゐる。

女給。お酒はお氣に召しましたか。

新聞賣子。號外——大強盜の號外。

青年。僕はもうさうぢやない。

聲。(下から) 幕だよ。

アレクサンダア。おれ達は墓の中にゐるのだ。

少女。(手で腹を押す) 子供が動く。

聲。(下から) 椅子を一つ。

青年。永遠だ。

アレクサンダー。門は開かれた。

開幕を知らせる鐘が鳴る。

聲。(下から) 大詰が明くよ。

青年。僕は世界を見るのだ。

微に音楽。

青年。最後の牧場だ。

醫者。(右の棧敷へはひつて来る。燕尾服。白手袋) 十マアク。

青年。(紙幣を投げつける) おれは迷つてゐるのだ。

醫者。(紙幣を掴む)

リッシ。(醫者の棧敷へはひつて来る。笑ふ。紙幣を盗む)

テノル獨唱。Donna & mobile.

醫者。(帷を締める)

右の棧敷が暗くなる。

青年。(立ち上がる)

アレクサンダー。君の外套だ。(自分の肩から引廻しの外套を取つて、それを青年に着せる)

青年。(胸壁の帷を裂いて取る。舞臺が明かるい。音楽の間奏)

喇叭。

青年。(棧敷から轉げ落ちる。樂器が一齊に鳴る)

少女。ここは何處です。

アレクサンダー。復活だ。

第三幕

第一場

街路。

奥に窓のある家。中段にバルコン。下はカフェエ。戸外に卓三つ、中央の卓はバルコンの下にある。

左手に廣告塔——「殺人犯」といふ外題の書いてある赤いポスター。それに對して、右手に乞食。

助手。(右手の卓に坐つてゐる)

乞食。(手風琴で Donna e mobile. を弾く。醫者とリッシがバルコンに出て来る)

年とつた給仕人。(カフェエの中で、抽斗を抜いてゐる)

アレクサンダア。(袋を持つて出て来る。ポスターの前に立ち留る)

醫者。(家から出て来て、助手の隣りへ腰をかける)

助手。相場は高い。

アレクサンダア。(左手の卓に坐る)

新聞賣子。月の銀行——創立

給仕人。(飲物を持つて来る。新聞を買ふ)

醫者。珈琲。

給仕人。(アレクサンダアの側へ行つて、新聞を読む) 人殺しだ。

アレクサンダア。(見上げる)

助手。資本だ。

醫者。(頭を振る)

アレクサンダア。お前は神を信ずるか。

給仕人。吾々人間は。

乞食。(手風琴を弾く)

啞達。(中央の卓へ来る)

給仕人。(その方へ行く)

啞達。(手眞似で話をする)

醫者。(叫ぶ) 啞だ。

給仕人。(頷いて、家の中へはひる)

アガアテ。(裸足。十四歳、箱を持つて出て来る) マッチは入りませんか。

助手。(追ひのける)

醫者。(笑ふ)

啞達。(金をやる)

アレクサンダア。(抱へてやる)

リツシ。(バルコンに現れる。啞達に目で合圖をする) お金はお金だよ。(消える)

助手。おれ達は借金で生きてゐるのだ。

アレクサンダア。お前の名は何と言ふのだい。

アガアテ。アガアテ。

助手。少年労働か。

アガアテ。あたい達は食べられないんだ。

助手。紙だ。

醫者。(紙幣を出す) おれ達は財産を持つてゐる。

助手。(證書を出す) 買つてくれますか。

醫者。(紙幣を衣兜に突つ込む。時計を出す) 出産だ。(立ち上がる)

乞食。(手風琴を弾く)

アガアテ。お母さんが死にかけてゐる。

醫者。(去る)

助手。(あとを追ふ)

アガアテ。助けて下さい。(アレクサンダアの手をとる。二人、出て行く)

啞達。(手眞似で話をする。「殺人犯」といふ外題の書いてあるポスターを指さす)

第二場

屋根裏部屋。

右手に梯子段のある玄關。傾斜した天井。奥に窓一つ。窓の向うに屋根が澤山見える。左手の寢臺に死にかけてゐる母。中央に卓一つ。椅子三脚。まん中の椅子に白髪の父。右手に旅行用の籠。

屋根裏部屋が明かるくなる。

母。(呻く)

父。(動かない)

玄關が明かるくなる

アガアテとアレクサンダアが梯子段を上がつて来る。

玄關が暗くなる。

アレクサンダア。(はひつて来る)

母。まあ、お前かい。

アガアテ。お母さんは熱があるんだよ。

母。せがれ。

アレクサンダア。(寝臺の側へ行く)

母。(その手を取る) あたしは旅へ出かけるよ。

アガアテ。(枕を直す)

母。汽車が出る。

アレクサンダア。(旅行用の箱の方へ行く)

母。荷造りをしておくれ。

アレクサンダア。(箱を開く)

母。婚禮なんだよ。

アレクサンダア。(戸棚へ行つて、襦袢を引っぱり出す。それを箱の中へ入れる)

母。襟留は。

アレクサンダア。(簞笥へ行つて、襟留を見つける)

母。聖書は。

アレクサンダア。(卓へ行つて、聖書を抽斗から出す)

母。お金は。

アレクサンダア。(布團から紙幣を引っぱり出して、口の中へ押し込む)

アガアテ。(合掌する) お母さんの望み通りになりますやうに。

アレクサンダア。(箱の蓋をする)

母。切符は。(アガアテとアレクサンダア、卓の前に坐る)

母。(呻く)

アガアテ。お父さん。

母。(臨終の咽喉を鳴らす)

静寂。

窓が明く。

父。死だ。(三人、ちつと坐つてゐる)

玄関が明かるくなる。

人々、梯子段を上がつて来る。鍵穴から覗く。囁き合ふ。

玄関が暗くなる。

人々、はひつて来る。部屋が影で一ぱいになる。

黒衣の人。葬式だ。(一同、近くへ寄る。卓を押し圍む。父、アガアテ、アレクサンダア、手を伸ばす。人々の姿、消える。部屋が暗くなる。卓が明かるく見える)

父。お前は誰だ。

アレクサンダア。おれはおれを探してゐるのだ。

父。人間だ。

アレクサンダア。(父の前に頭を下げる)

アガアテ。(笑ふ。卓が暗くなる。屋根の上を鳥が飛ぶ)

5

第三場

病院。

中央に診察室。右手に手術室。左手に助産室。

手術室と診察室が明かるくなる。

看護婦。(診察室に坐つてゐる)

医者。(手術室に立つてゐる。硝子の戸棚へ行つて、胎児を取り出す。それを燈にかざして見る。

それから手術臺の上へ置く)

看護婦。(編物をしてゐる)

醫者。(扉を明ける) 診察は。

看護婦。三人です。(帳面を繰る) 九の月です。

醫者。(扉を閉ぢる)

手術室が暗くなる。

助産室が明かるくなる。

娼婦達。(三つの寢臺に寝てゐる。四番目の寢臺は明いてゐる)

テア。(化粧刷毛と懐中鏡を持つて) 莫迦。

ギルダ。チョコレエトだよ。(食べる)

レナ。金持の宮様は死んだよ。(花束の方へ手を伸ばす)

ギルダ。(花を奪ふ) あたいの花だよ。

テア。(腹を叩く) ベルが鳴るよ。

ギルダ。おはひり。

一同くすくす笑ふ。

少女。(診察室へよろよろはひつて来る。壁につかまる。へたつてしまふ)

看護婦。(氣を喪つた少女を助産室へ引きずつて行つて、四番目の寢臺に寝かす)

醫者。(診察室へはひつて来る)

看護婦。(歸つて来る) お産です。

ギルダ。(腕を伸ばす) 踊らうよ。

テア。お醫者さんだ。(出してある物を隠す)

醫者。(はひつて来る。少女の側へ行く。血を見る) 不潔な奴だ。

少女。(眼をあ。く醫者を見る。叫ぶ) けだもの。

醫者。マスクだ。

看護婦。(器械をのせた患者運搬車を押してはひつて来る)

少女。(抵抗する) 厭だ。

醫者。(少女をしつかり捕まへる)

看護婦。(クロロフォルムのマスクをかぶせる)

醫者。數をなさん。

少女。(段々力がなくなる。啜り泣く) 二十一——二十二。

醫者。しめた。

看護婦。(クロロフォルムのかかつた患者を運搬車にのせる)

醫者。(診察室を通つて、手術室へはひる)

看護婦。(その後から車を押してはひる。手術室の扉が締められる)

テア。(唸る)

ギルダ。鉗子だ。

レナ。あたし泣くよ。

テア。(吐瀉する)

ギルダ。あたしの體は。

レナ。(手を絞る) お母さん。

ギルダ。天の神様。(布圍の中へもぐり込む)

静寂。

手術室で何かの器械がちやんと落ちる。

テア。(躍り上がる) 子供が生れたんだよ。

醫者。(手術室から血だらけの手で出て来る。手を洗ふ) 穢い。

第 四 場

街路。

廣告塔に對して、乞食。中央の卓に啞達。他の二つの卓はあいてゐる。

啞達。(手眞似で話をする。「殺人犯」といふ外題の書いてあるポスターを指さす)

新聞賣子。號外。

年とつた給仕人。(戸口の前へ出て来る。掃除をする)

新聞賣子。人殺しの足がついた。

給仕人。(新聞を買ふ)

新聞賣子。(去る)

乞食。(手風琴を弾く)

右手から葬式の行列が出て来る。黒い著物を著た人夫が、屋根裏部屋にあつた卓を擔いで来る。卓の上には、棺衣を著た母が、むき出しの儘横になつてゐる。手が胸の上で十文字に組まれてゐる。卓の後から牧師が来る。その後父とアガアテが従ふ。最後に、袋を持つたアレクサンダア。

左手から人が大勢出て来る。

道の真ん中で、葬式の行列がその人々によつかる。人々は道を遮つて、拳を固め、勘定書を振り廻す。

人夫が卓を下に置く。

人々。勘定をくれ。

ある男。麵包の代だ。

ある女。家賃だ。

人々。金だ。

一同。死骸に襲ひかかる。死骸を引つ掻き廻す。

牧師。(呪ふ) 愛する教區民よ。

人々。(襤褸を地面の上に投げ出す。死骸が裸になる)

黒い著物を著た男一人。金がなければ——葬式もない。(人夫達、卓を置き去りにする)

牧師。(嘆息する。父に向つて手を振る。死骸は寂しく路上に横たはつてゐる)

アレクサンダア。(前へ出る。一同、後へ下がる。自分の體から著物を裂きとつて死骸を蔽ふ)

牧師。(首を振る。去る)

アレクサンダア。(死骸を抱き上げる)

人々。(卓を擔いで逃げる)

啞達。(立ち上がる。往來の石をどける。手で墓を掘る)

アレクサンダア。(死骸を土の中へ置く。人々が總ての窓から覗く。リツシがバルコンへ出て来る)

啞達。(墓の上に土をかける)

新聞賣子。(新聞を持って、出て来る)人殺しの足がついた。

アレクサンダア。(袋を肩に擔ぐ)

新聞賣子。首は袋の中にある。

アガアテ。(アレクサンダアの前に跪き、その手に接吻する)

給仕人。(ちつとアレクサンダアを見る)

第五場

搖籃。

少女。

坊やは好い子だ。寝んねしな。

青い小さな目をつむれ。

どこも静だ。墓のよに。

寝んねん蠅めは追つてやる。

可愛い天のお使が。

寝臺を飛んでは笑つてる。

今が一番好い時だ。

あとちや中々かういかぬ。

第四幕

第一場

倉庫。

寢臺、枕元の小卓の上に蠟燭。うしろに壁。

アガアテ。(著物をぬいで、髪を解く。書翰用の紙をとつて、書く)

聲。あしたは祭だ。

アガアテ。(手紙を褶む。笑ふ。それを寢床へ持つて行く。蠟燭が揺れる)

アガアテ。可愛い人。

戸口に音がする。

聲。靴を磨きます。

アガアテ。(びつくりする。上著をとる。近寄る。笑つて、手紙を唇に押しつける。物思はしげ

になる。泣く。蠟燭が揺れる。上著が床へ落ちる)

アガアテ。(眠りに就く。壁が消える。ある景色が現れる。星の空。蠟燭が消える。太陽と月が

昇る)

アレクサンダア。(景色の端に立つてゐる)

アガアテ。(腕をひろげる) 入らつしやい。

アレクサンダア。(景色の真ん中を通つて、寢臺の側まで来る)

アガアテ。(手紙を渡す)

アレクサンダア。(寢臺の側に坐る) お泣きでない。

アガアテ。接骨木よ。

木に花が咲く。

アガアテ。風が吹く。

アレクサンダア。(アガアテを撫でる) 蝶々。

時計が鳴る。

アレクサンダア。おれの運命が来た。

アガアテ。あたしはあなたに附いて行きます。

アレクサンダア。(笑ふ) 可愛い奴。(星が一つ日光に輝く景色の中を落ちる)

アレクサンダア。總てが變つた。(アガアテに接吻する。景色が消える。壁が現れる。アレク

サンダア、わなくなる。蠟燭の火がつく)

アガアテ。(目を覚ます)

聲。起きるのだ。(蠟燭が揺れる)

アガアテ。(寢床から飛び出して、戸棚のところへ駆けて行つて、造花を取り出す。それを胸へ押しつける) 春だ。

倉庫が暗くなる。

景色が又現れる。今度は灰色で、普通の景色である。

アレクサンダア。(ベンチの上で目を覚ます。袋を見つける。調べるやうに、袋を見る)

第二場

客間。

リッシが長椅子に横になつてゐる。醫者が女の足を膝の上に載せてゐる。人形が安樂椅子に腰をかけてゐる。

リッシ。(扇子であふぐ)

醫者。(色青さめ、目が凹んでゐる) 可愛い人。

リッシ。 觸つちや厭。

醫者。(女に指を觸れる)

リッシ。(足で男を蹴る)

醫者。(衣兜からモルヒネの注射器を出して、自分に注射をする)

リッシ。(欠伸をする)

醫者。 白鼠。

助手。(はひつて来る)

醫者。(口の中へ手を突つ込んで、齒を掴み出す)

リッシ。 毀れて來たね。

助手。 第三期だ。

醫者。(人形の上へ身を屈める。黒眼鏡をかける) 妊娠だ。

リッシ。 棺だ。

醫者。助産だ。(衣兜からメスを出して、人形の腹部を切る)

助手。金だ。(注射器を醫者の頭に突き刺す)

醫者。(斃れる)

リツシ。(長椅子から醫者を突き落す)

助手。(醫者の上著に手を突っ込んで、紙幣をひっぱり出す) 金鑛だ。

リツシ。(人形を膝の上取る)

助手。(死骸から髪の毛を引っこ抜いて、その髪の毛を手を持つ)

リツシ。死は死だ。

助手。(死骸を窓から捨てる)

第三場

卓。椅子。

袋が卓の上のつてゐる。アレクサンダアが椅子に腰かけてゐる。

アレクサンダア。(袋を開く)

首。(轉げ出る)

アレクサンダア。(後しざりをする) おれの首だ。

首。おれの體だ。

アレクサンダア。おれは殺されたのか。

首。殺した奴は生きてゐる。

アレクサンダア。あいつはもう許された。

風一陣。

アレクサンダア。あいつは墓の中にある。

首。罪を償へ。

アレクサンダア。おれがあいつの代りに生きてゐるのだ。

籠燈。

燈光の内に、年とつた給仕人、檢察官、巡查。

年とつた給仕人。(アレクサンダアを指さす) 人殺し。

檢察官。(アレクサンダアを捕縛する)

給仕人。(帽子を脱ぐ)報酬を。
検察官。(袋を見つける)首は袋の中にある。

第四場

陪審裁判所。

左手に判事、裁判長。その前に検事の坐つてゐる斜卓。奥の方に陪審官達。右手に傍聴席。亭主、客、紳士達、娼婦達、乞食、新聞賣子、女給。手摺の前にアガアテ。その前に證人の腰掛。年とつた給仕人。中央の卓の上に首。その側の椅子にアレクサンダア。

裁判長。(手に袋を持つて)首が證據だ。

判事達。(頷く)

裁判長。被告。

アレクサンダア。(顔を上げる)

裁判長。服罪するか。

叫び聲。人殺し。

アガアテ。いいえ。

裁判長。靜に。

年とつた給仕人。(指を上げる)誓ひます。

裁判長。「神のみます如く眞なり。」

給仕人。アアメン。

裁判長。検事。

検事。(起立する)尊嚴なる判事諸君。

陪審官達。(見上げる)

検事。一人の人間が殺されたのだ。

アレクサンダア。(検事の顔をちつと見る)

検事。目にて目を償へ。

傍聴人。(頭を下げる)

検事。死刑。(坐る)

裁判長。被告。

アレクサンダア。(黙つてゐる)

裁判長。審議。

判検事、陪審官など、退席する。法廷が空になる。アガアテとアレクサンダアと、二人だけ残る)

アレクサンダア。(振向く。アガアテに目をつける)

アガアテ。(笑ふ) あたしはあなたに附いて行きます。

アレクサンダア。(何も分からない。額を掴む)

アガアテ。あたしはあなたを愛してゐるのです。

法廷が又一ばいになる。判検事、陪審官などが歸つて来る。

少女。(傍聴人の中へはひつて来る。飢ゑてゐる。子供を胸に抱へてゐる)

裁判長。國王の名に於いて。

一同、起立する。

陪審長。有罪だ。

少女。(子供を差し上げて) 飢餓だ。

検察官。(少女を突き出す)

裁判長。死刑を宣告する。

一同、著席する。

アレクサンダア。(立つ)

静寂。

アレクサンダア。おれが殺されたのだ。

裁判長。冗談を言つてはいかん。

アレクサンダア。(首をとつて、高く差し上げる) これはおれの首だ。

叫喚と哄笑。

叫び聲。聽け。聽け。

アレクサンダア。おれは贖罪する。

裁判長。公判を終わります。

アレクサンダア。人はみんな人殺しだ。

混乱。

叫び聲。 癡狂院へ。

第五幕

第一場

女卜者の家。

長椅子に女卜者。左に少女。右にリツシ。女卜者と向ひ合つた椅子が暗くなつてゐる。

女卜者。 (骨牌をまぜる)

リツシ。 (骨牌を切る)

女卜者。 (兩方の手に半分宛骨牌をとる。あけて見る) 憎みだ。 (少女とリツシ、顔を見合ふ)

女卜者。 (骨牌をリツシの方へ出す)

リツシ。 (骨牌を一枚抜く)

女卜者。 (それをあけて見る) 誰か来た。

リツシ。 (恐怖して、手を上げる)

少女。 (ナイフを出す。女卜者が暗くなる)

椅子が明かるくなる。

二人、兩方から掴みかかる。リツシ、ナイフをもぎ取らうとする。少女、リツシの胸にナイフを突き刺す。

リツシ、少女を絞め殺す。

椅子が暗くなる。

死の痙攣。

第二場

癡狂院。

獸の形をした人間達。中央に助手、

狂人達。(匍伏す)

助手。(王座に登る)

聲。(外から)第二十號。

アレクサンダア。(はひつて来る)

助手。(王冠を戴く)

アレクサンダア。(倒れる。四つん這ひになる)

第三場

街路。

カフエエの前に、年とつた給仕人。

新聞賣子。死刑だ。

アレクサンダア。(引き出される)

年とつた給仕人。(縊れて死ぬ)

第四場

監獄。

夜。アレクサンダア、鎖につながれてゐる。奥に格子。鈍く戸を叩く音。

アガアア。(蠟燭を持って、はひつて来る)あたし、あなたを助けに来てよ。(鎖をとつて、自分にかける)

静寂。

戸口があく。

アレクサンダア。(外へ出て行く)

格子が明かるくなる。

燕尾服の紳士達、絞首臺の廻りに立つ。裁判長、検事。

牧師。(出て来る)

アガアテ。(笑ふ。あたりが暗くなる。天が現れる。塔から讚美歌)

第五場

墓地。

曙光。

アレクサンダア。(袋を持つて来る)

人殺し。(墓から出て来る)

アレクサンダア。(袋を渡す)

人殺し。袋が空になつてゐる。

アレクサンダア。(墓へ行つて、その中へはひる)

太陽が昇る。

人殺し。(両手をひろげて)おれは愛す。

(終)

決定 (二幕喜劇)

—一九一九年—

序 曲

銃聲。舞踏曲。叫喚。

人物

人間

公爵レエゲンシュタイン
タルムウド。取引商

軍務大臣

教育大臣

法律大臣

首領

フロオラ嬢

偉大な人

時

今日

↑
場所

或ホテルの前房

右手及び左手に戸口。正面奥に窓。中央に緑の卓。前に喫煙卓。右手、空になつた瓶の前に、頭を卓の上に載せて、一人の男が眠つてゐる。左手に巻物を着た「人間」、燕尾服を着た公爵レエゲンシュタイン。

人間。 僕は死刑の宣告を受けた。僕は軍法會議へ廻された。僕の本は没収された。僕は銃殺されなければならなかつた。ところへ革命が勃發した。僕は助かつた。

公爵。 わたしはきめなければならぬ。

人間。 僕は叛逆者として告發された。僕は要塞から引きずり出された。僕は赤い旗を見た。それから僕は意識を失つた。

公爵。 わたしは旅へ出るか――

人間。 僕はこのホテルで目を覚ました。僕が見た最初の人間は君だつた。

公爵。 或はボオイにならなければならぬ。

人間。 僕は湯にはひりたいと思つた。そして君のテーブルにぶつかつた。

公爵。 政府が顛覆したのをあなたは御存じですか。

人間。 僕は病氣だつた。

公爵。 銀行が破壊されました。

人間。 僕は熱があつた。

公爵。 町中に暴動が起つてゐます。あの銃聲が聞えますか。上ではダンスをしてゐます。下には捕縛された人間がゐます。ここは革命の中心です。わたしは三月みづか以来、大臣達が如何に食ひ如何に飲み如何に死刑の宣告をするかを観察しました。

人間。 僕は革命を寝てしまつた。

公爵。 あの緑のテーブルが見えますか。この建物が占領されると、ここで會議が開かれました。ここには食料があります。この場所は神聖です。階級差別は徹廢されました。人は獻立に據つて生きてゐるのです。

人間。 公爵。

り公爵。 わたしは親父の屋敷から寢臺を一つこへ運んで來ました。軍務大臣が天蓋の下で眠

たいと言ふのです。政府も暴徒も、同じやうにこのホテルを使はうとしてゐます。町が打ち壊されたのですから、外に政治を執る場所はないのです。ここにはまだ古い酒の貯蓄があります。どの大臣もどの大臣も即決裁判をする前には、きつとコニヤックを飲むのです。

人間。 僕にはなんにも分からない。

公爵。 賤民がわたしの家の衣裳戸棚を奪略した跡に、わたしの燕尾服が唯一つ残つてゐました。わたしはもう玉座などに坐つてはゐられません。わたしは職業を求めなければなりません。

人間。 僕はどこにゐるのだ。

公爵。 つひ隣りで博奕が行はれてゐます。黨派は始終變ります。けふ上にゐたものが、あしたは下になるのです。夜になると軍隊が組織されるでせう。

取引商タルムウド、入り来る。

タルムウド。 三萬マルク——一組。

公爵。 革命の所得だ。

或叫び聲。

人間。 あれを聞いたか。

タルムウド。銀行は破産した。

公爵。この下では誰でも殺されるのだ。

タルムウド。穀物はいりませんか。大麦がうんとあるのです。上等品です。

公爵。新しい國家だ。

タルムウド。諸君、わたしは監獄にゐました。わたしは自由を擁護しました。取引商人の仲間に聞いて御覽なさい。わたしの名はタルムウドです。わたしはみんなに知られてゐます。

人間。銃聲がだんだん近くなる。

タルムウド。珈琲が暴騰する。(人間に向つて) わたしはあなたを知つてゐます。わたしはあなたの本を読みました。わたしは全くあなたと同意見です。金とは何ですか。

人間。失敬だが――

タルムウド。わたしは人間を二つに分けます。一部は欺くものです。他の一部は禁錮されるものです。わたしは國國を遍歴しました。わたしは取引商人です。わたしは政治家になることも出来るのです。わたしはこの世界が一つの錯誤であることを知りました。そしてあなた方が生きて行かれるやうに心配してゐるのです。

公爵。民衆は成熟した。

タルムウド。民衆は價値だ。わたしの商賣はデモクラシーの始まりだ。わたしが只で馬鈴薯を分配したら、あしたわたしは總理大臣になるだらう。

公爵。わたしは保守黨だ。

タルムウド。わたしの用意はもう出来てゐる。(人間に) わたしはあなたの思想に勵まされました。あなたは革命の先鋒に立つた方だ。けふはもう決定の時が来てゐます。橋は爆破されました。取引所は閉ぢられました。政府はもう一日も生きてゐることは出来ません。御覽なさい――
(眠つてゐる男を指さす)

公爵。あれは誰だ。

タルムウド。(小聲に) あの人は眠りながら考へてゐる。

公爵。あの人は駢をかいてゐる。

タルムウド。あれは偉大な人だ。

公爵。あの禿頭がか。

タルムウド。あの人は吾々を洗濯してくれたのだ。あの人は十萬からの石鹼を持つてゐる。あの

人は貨車に十臺の煙草を外國へ送り出した。どの政府もあの人とは關係があつた。

公爵。あの人には革命に興味を持つてゐるのか。

タルムウド。あの方は素敵に大きな取引をする。

公爵。天才だな。

タルムウド。諸君。あの方は來るべき人です。

公爵。あの人をおこすが良い。

タルムウド。わたしは口を出すのは厭だ。

音楽。

人間。しつ。

タルムウド。上では婦人達が選挙をしてゐるのだ。

公爵。吾々は新政府の爲に立派な祝宴の用意をしてゐるのだ。

タルムウド。吾々は民衆の政治を要求する。

人間。また撃つてゐるな。

タルムウド。(獄の側に立つて)町が包圍されてゐるのです。

軍務大臣、法律大臣、教育大臣、入り來る。

公爵。大臣の會議だ。

軍務大臣。わたしが議長にならう。最初の發言權は法律大臣にある。

一同、縁の卓に向つて坐る。

法律大臣。事態は要求する――

教育大臣。この大きな出來事の前に。

軍務大臣。新聞にはどう書いてあるのだ。

教育大臣。(小聲に)吾々はどこへ向つて進んだら好いのだ。

軍務大臣。吾々の閣僚は叛逆に依つて交通を絶たれてゐるので、執政權はわたしの手に移つて來てゐる。わたしは軍務大臣として責任を負擔する。

人間。あの本を澤山持つてゐる男は誰だ。

公爵。教育大臣です。あの方は文學を研究してゐるのです。

軍務大臣。わたしは民衆に家を離れてはならないと命令する。

法律大臣。捕縛した人間はどうするのですか。

教育大臣。わたしはわたしの改革案を彼等に實行させました。
公爵。それは死だ。

軍務大臣。わたしは野外の集合を禁ずる。武器の携帯を禁ずる。

爆發。

軍務大臣。わたしは戒嚴令を布く。

フロオラ嬢、入り来る。

フロオラ。どうしたの。誰が鐵砲を打つてるの。あたし達は踊りたいのよ。(タルムウドに) お金を頂戴。

タルムウド。事態は眞剣だ。

フロオラ。あたし、お金をなくしてしまつたの。

タルムウド。軍務大臣の方を御覽。

軍務大臣。諸君、十二時に――

フロオラ。六時までに撃つてしまへば好いわ。さうすれば踊が踊れるから。

教育大臣。學校の改革に就いて一言。

フロオラ。どこに人間の權利があるのよ。

法律大臣。撃て。

フロオラ。あたしは自分の發言權を用ひただけよ。(去る)

教育大臣。(軍務大臣に)閣下。民衆に話して下さい。

公爵。わたし達は國歌を歌はう。

軍務大臣。わたしが司令しよう。

タルムウド。同僚、それはいけない。それは危険だ。

軍務大臣。(教育大臣に)大臣、戦争の様子はどうですか。

教育大臣。(窓の側に立つて)外には死骸が澤山ころがつてゐます。

軍務大臣。窓を明けて下さい。わたしが即決裁判をします。

教育大臣。あなたがですか。わたしがですか。

軍務大臣。勇氣だ。(自分で窓を明ける)民衆よ。

爆發。

公爵。(椅子からころがり落ちる)

タルムウド。 待て、君達は人を間違へて撃つたぞ。

公爵。 (立ち上がる) 無意義の戦場に倒れたのだ。

法律大臣。 わたしは總てが古いものにつけば好いと思つてゐる。

タルムウド。 (人間に) これはあなたの責任だ。

軍務大臣。 そこで。

フロオラ。 (月口を明ける) 樂隊がストライキをしてしまったわ。

教育大臣。 家が燃えてゐる。

軍務大臣。 吾々は崖の上で踊を踊つてゐるのだ。

法律大臣。 わたしは退職します。(自分のものを取り纏める)

軍務大臣。 わたしはわたしの軍隊の爲に金を使ひます。(教育大臣に) 書き取つて下さい。(書き

取らせる) 兄弟よ、兄弟の戦ひを止めよ。

教育大臣。 シルレルの引用ですか。

軍務大臣。 「神聖なる秩序は——」

窓が打ち毀される。

タルムウド。 諸君、早くおいでなさい。

暴徒等、窓よりなだれ入る。

首領。 手をあげろ。 勤くと打ち殺すぞ。

公爵。 好い調子だ。

首領。 政府は顛覆した。

軍務大臣。 わたしの給料は。

首領。 囚人はどこにゐるのだ。

教育大臣。 わたしの改革案は。

法律大臣。 (本を渡す) これが刑法です。

首領。 みんなを拘留する。おれは新しい政府だ。(緑の卓の前に坐る) 紳士方を下へ連れて行け。

大臣達、連れ去らる。

公爵。 時が来た。(大きな聲で) わたしは御命令に従ひます。

首領。 お前の名は。

公爵。 公爵レエゲンシユタイン。

首領。 職業は。

公爵。 ボオイです。

首領。 では、ビイフステエクを一つ持つて来い。ビイフステエクとそれから葡萄酒を一本。去る。

首領。 公爵、おれは民衆の執政官になつたのだ。

タルムウド。 わたしは民衆の友達です。

首領。 黙つてゐろ。

公爵、食物を持つて来て、それを縁の卓の上に置く。

タルムウド。 わたしは砂糖漬の果物を貯へてをります。あなたの軍隊はおなかが減つていらつしやるでせう。

首領、食ふ。

タルムウド。 わたしは豚の脂肪を十箱と穀物を車に十臺提供いたします——

首領。 プロレタリアよ。(タルムウドの方へ手を差し伸べる)

タルムウド。 わたしは社会主義者です。(二人抱き合ふ)

首領。(公爵に)かたづけろ。

公爵、皿を持つて出て行く。

首領。 議長が必要だな。

タルムウド。 それはあの人です。(眠つてゐる男を指さす)

首領。 どこに。

タルムウド。 民衆の一人です。

首領。(眠つてゐる男の側へ行く)もし、あなた。(ゆすぶる)お起きなさい。

偉大な人、眠りこけてゐる。

首領。 あなたは議長になるのです。

フロオラ。(はひつて来る)聞えやしないわ。

偉大な人。 シャンパン——(眠り続ける)

首領。 わたしはあなたを指命します。

フロオラ。(膝を屈めて禮をする)議長さん。

首領。 どうしたのだ。

フロオラ。 びつくりするでせう。

首領。 フロオラ。

フロオラ。 お前さん、出世をしたことね。

首領。 部屋を一つ取つてくれ。おれは政治を執らなければならないのだ。

フロオラ。 それに寝臺が二つね。

首領。 それから、湯殿に電話だ。

フロオラ。 去る。

首領。 けふの内に憲法を制定してしまはなければならない。

タルムウド。 (首領をわきへ連れて行く) わたしにも何か地位がありませうか。

首領。 (衣兜から手帳を出して讀む) 内部大臣、外部大臣、宗教大臣と——労働大臣はどうです。

タルムウド。 結構です。

人間。 ちよつと待つて下さい。

首領。 なんだ。

人間。 僕は詩人です。僕も聞いて貰ひたいことがあります。

首領。 君は革命の詩を書き給へ。

人間。 簡単に言ひます。そして僕は直ぐ失敬します。これは政治に於ける僕の最後の冒険でした。

首領。 この男は氣ちがひだ。

タルムウド。 その男は取引商人です。

人間。 その通りです。諸君。僕は人間です。僕は僕とおなじやうな人間の爲に苦しんで來ました。僕は戦ひました。僕はもう少しで殺されるどころでした。

首領。 反動主義だ。

人間。 戦ひは終りました。しかも、殺戮は續いてゐます。僕はあなた方に先鞭をつけました。

わたしは自分自身に死刑の宣告を與へます。僕は政治的詩人としての詞を見出した時、精神に働きかけることが出來ると信じました。僕が僕の確信の爲に死なうとして生きて來たことは、僕の誤りではなかつたのです。僕の信仰は欺かれました。あなた方には精神がありません。

首領。 即決裁判にかけろ。

タルムウド。 (額を指さす) あの男は氣ちがひです。

人間。御心配には及びません。わたしは好い時に消えてなくなります。捕縛の恐ろしさは、わたしはよく知つてゐます。死刑の宣告は喜んで受けます。わたしは外の國で目を覺まします。

首領。おれはそれを渴望する。

人間。まあ、外を御覽なさい。死骸があなたの家の前につてゐます。暴力と飢によつてあなたが奪ひ得た國土は——何者でしたか。あなたはその廢墟の上に何を築きましたか。或他の世界、しかもそれは前と同じ世界でした。諸君、わたしはこの世界をいつでも見捨てます。あなたの人間も、あなたの民衆も、あなたの國家も、あなたの法律も、あなた自身も最早わたしの要求するものではありません。わたしはあなたの愚劣さを編み込んでゐる歴史の外に立つてゐます。

首領。あいつを撃ち殺せ。

人間。絞首臺をお立てなさい。あなたの組織をお繰り返しなさい。いつまでも自由と人權とに酔つておいでなさい。反對者のある限りは、反對者を殺すことをお忘れなさんな。わたしは一人の人間を探す爲に出て行きます。併しわたしは恐らくわたし以外の何者をも見出だすことは出来ないでせう。わたしは始めます——わたしは裁判します。あなたは外の人をお裁きなさい。

わたしはもうここにはゐません。わたしは永遠の内にゐるのです。

窓を通して銃丸飛び来る。

人間。(倒れ死す)

首領。(外に向つて叫ぶ)命中。

タルムルド。豚が死んだ。

笑ひながら二人出て行く。

フロオラ。はひつて来る。

フロオラ。おや、ひとり。(眠つてゐる男の側へ行く) 駢をかいてゐる。(戸口へ行つて呼ぶ) ワルツを一つ。

音楽。

(二つ三つ舞踏のステップを踏む。それから眠つてゐる男の側へ歸つて行つて、その膝の上に坐り、紙入を引つ張り出して紙幣を抜き取り、眠つてゐる男の禿頭を軽く叩く) 共和政府萬歳。

—幕

黒死病

(五巻の映畫劇)

船 船 船

醫 長 手

執 花 花

事 嫁 婿

副
人
物

死 子 銀 舞 發 戀 學
供 行 家 姬 見 者 人 生

主
要
人
物

瘠せた夫人	牧師
肥つた紳士	老人
電信技師	瀕死の男
大臣	公證人
公爵	支配人

序 卷

第一齣

「紀元二千年、世界は樂園となる。」

塔。町。河。輝々たる日光。船。旗。

第二齣

行列。子供達、花を撒く。正装せる僧侶。棕櫚の枝。

第三齣

「永遠の平和！」

車道。馬車。自動車。騎馬の人。

第四齣

村。踊。音楽。

第五齣

屋上庭園。裝飾燈。紳士淑女。

第六齣

「人工麵包の發見。」

實驗室。試験管。化學的混合物。

第七齣

機械の装置。蒸氣。電熱。槓杆に於ける壓搾——麵包。

第八齣

大食堂。卓の上に麵包。人々入り來り、麵包を切り、食ふ。

第九齣

「貧困絶滅。」

警察署。乞食、襤褸を脱ぎ捨て、著物と靴を受けとる。睡眠。

第十齣

「親睦。」

街路。雜沓。人々相抱く。笑ひ顔。點頭。

第十一齣

「世界博覽會。」

公園。天幕。ボスタア——歐羅巴の同盟國。散步道——白人、黒人、黒白の混血兒、日本人。

第十二齣

假面祭。繰り出し紙。コンフェツチ。パツカナル。踊つてゐる人達が暗くなる。天空。血のやうに赤い星一つ。

「紀元二千年、世界は滅ぶ」

踊つてゐる人達が明かるくなる。戸口の方へ押し寄せる。戸が明く。「死」がはひつて來る。

第一卷

第十三齣

「巨船、印度洋を離る。」

或大きな船の倉庫。起重機。包装。箱。印度人の顔。貨物が積み込まれる。

第十四齣

全速力で走る汽船。烟突が烟を吐く。

第十五齣

甲板の生活。旅客。

第十六齣

電信室。電信技師が機の前にゐる。

「グリーンキツチ天文臺、二時三十分、彗星發見。或豫言に依れば、世界終焉の前兆。」

第十七齣

食堂。伊達者の集まり。電報が手から手へ。驚愕。頭を振る。瘖せた夫人が笑ふ。

第十八齣

倉庫。氣違ひのやうになつた鼠が一疋、そこから中を荒れ廻る。

第十九齣

夜。甲板。燕尾服の紳士。夜會服の淑女。望遠鏡。星の空。一同、望遠鏡を覗く。

第二十齣

望遠鏡の圓内に、血のやうに赤い星が一つ。

第二十一齣

肥つた紳士が杯をあげる。

「世界終焉の爲に。」

一同杯を打ち合す。

第二十二齣

下等船室。薬蒲團に眠る人々。鼠はそこを駈け抜けながら、眠つてゐる人間の一人を噛む。噛まれた人間が、跳ね起きて、體を掴む、眠つてゐる人達が、みんな目を覺ます。

第二十三齣

船内の病室。病人が知覺を失つてゐる。聽診器を手にした船醫が、内臓を聴き、脈をとり、眼を閉く。

第二十四齣

下等船室。子供を抱いた女達。食物が分配される。ぶりきの皿。食事をしてゐる一人が皿を落す、卒倒する。みんなが介抱する。介抱してゐる人間の一人がよろよろとなる。

第二十五齣

船内の病室。黒い斑点をもつた病人。船醫が病人の腕の間から体温器をとる。

第二十六齣

水銀柱が四十二度を指し示してゐる。

第二十七齣

船長室。船長が海圖を見てゐる。船醫が白い著物を著て、はひつて来る。

「船内に死者あり。」

船長が驚いて、訊く。船醫が肩を縮める。

第二十八齣

船内の病室。病人が一ばいゐる。船醫がプレバアラトをとる。病人達が暗くなる。船醫が顕微鏡に取りつく。

第二十九齣

一等の甲板。森椅子。競技會。驚愕。一疋の鼠が駆け抜ける。紳士達が杖を以てそれを追ふ。

第三十齣

顕微鏡に取りついてゐる船醫。驚く。見上げる。又顕微鏡を覗く。頭を掴む。

「黒死病!!」

船醫が自失する。病人達が明かるくなる。

第三十一齣

食堂。肥つた紳士が杯をあげる。昏倒。杯が落ちて毀れる。隣りの人が紳士を支へる。一同が卓を離れる。

第三十二齣

船長室。船長と船醫。船醫が話す。船長が驚く。自分で自分を制する。話す。拳固で卓を叩く。威嚇。船醫が首を垂れる。船長と船醫が睨み合ふ。

第三十三齣

「秘密。」

夜。甲板。死骸が海へ沈められる。

第三十四齣

下等船室。死んだ母達の手に抱かれてゐる子供達。

第三十五齣

サロン。樂隊。或紳士、瘠せた夫人に煙草の火をつけてやる。夫人は一服するかと思ふと、前へ倒れる。樂隊がやむ。驚愕。

「毒?」

みんながその紳士に迫る。

第三十六齣

火夫室。瀕死の船員。一人の火夫が電話機へ這ひ寄る。話す。

第三十七齣

舵機。舵手が答へる。腰を抜かす。

第三十八齣

「舵を失ふ!」

船長室。一揆。船員襲來。船長が兩手に拳銃をとる。

第三十九齣

追はれる人達。

第四十齣

電信室。電信技手が機の前にある。船長がはいつて來る。技手が叩く――

「船員危険に瀕す!!」

電信技手が突然兩手を高く突き上げる。船長が發信器をとる。

第四十一齣

死人で一ばいの下等船室。

第四十二齣

鼠で一ばいの倉庫。

第四十三齣

電信室。船長が氣を失つてゐる。電信技手が床に倒れてゐる。

第四十四齣

船内の病室。船醫が病人の側にゐる。水がはいつて來る。船醫が爲事しごとを續ける。

第四十五齣

破船。

第四十六齣

「鼠、船を去る。」

夥しい鼠の群が死骸を越えて、水へ飛び込む。泳ぐ。

第二卷

第四十七齣

「港町の舞姫。」

街路。自動車。ボスタアの出でゐる寄席。舞姫が出て来る、自動車に乗る、走る。倉庫。船。ドック。自動車が港の路次で留る。古著屋の店。舞姫が自動車を降りる、

第四十八齣

「印度の衣裳。」

古著屋の店。「死」が古著屋になつてゐる。舞姫がはひつて来る。古著屋がお辭儀をする。舞姫が坐る、話す。古著屋が鞆をあけて、印度の衣裳を見せる。舞姫が頷く。古著屋が衣裳を擴げる。

鼠が一疋、飛び出す。舞妓がびつくりする。古著屋が笑ふ。舞姫が金を拂ふ。古著屋が衣裳を自動車へ運び入れる。

第四十九齣

衣裳部屋。衣裳を着けた舞姫。衣裳つけの女が手傳ふ。

第五十齣

「舞踊。」

寄席の内部。舞臺。観客。印度の舞臺装置。舞姫が舞ふ。

第五十一齣

衣裳部屋。衣裳つけの女が失心して床に倒れてゐる。舞姫がはひつて来る、びつくりする、ペルを押す。樂屋番が来る。

第五十二齣

新聞の切抜——

「昨夜の演技中、三百の観衆、忽ち病魔に襲はる。」
街路。ボスタアの出でゐる寄席。群集。

第五十三齣

穀物倉。穀物が動く。鼠。

第五十四齣

停車場。舞姫、自動車で乗りつける。切符。汽車。

第五十五齣

一等の車室。舞姫が他の旅客達と一緒にゐる。汽車が走る。舞姫が立ち上がつて、手鞆をあける。或紳士がそれを手傳ふ。例の衣裳が見える。舞姫が書物を取り出して、讀む。紳士が額を掴んで、クシヨンの上に倒れる。混乱。舞姫が非常制動機を引く。汽車が留る。紳士が運び出される。

第五十六齣

「大臣室。」

大臣が書物机の前かきものつくえにゐる。給仕がはひつて来る。電報。大臣、開いて見る——

「港町に於ける七百人の不可解なる死。」

第五十七齣

夜。汽車。機關車。きらきらする火。「死」が機關手になつてゐる。汽車が疾走する。明かりの點いてゐる窓。

第五十八齣

大臣室。給仕がはひつて来る。電報。大臣、開いて見る——

「黒死病の疑ひ。」

大臣、飛び上がつて、電話機を掴む。

第五十九齣

停車場。汽車が著く。舞姫が降りる。

第六十齣

「閉議。」

會議室。大臣がはひつて来る。閣員が立ち上がる。大臣が話す。秘書官が訓令を交附する。大臣が署名する。

第六十一齣

「總ての汽車、封鎖せらる。」

停車場。騎馬検査官。歩哨が出口を堅めてゐる。

第六十二齣

大きな廣場。號外。雜沓。舞姫の乗つてゐる自動車。「死」が運転手になつてゐる。

第六十三齣

「首都の防備。」

郊外。場末の町。人足が濠を掘る。

第六十四齣

街路。劇場。ボスタフ。舞姫の肖像。大勢の人が切符を買ふ。

第六十五齣

棧敷。公爵がはひつて来る。執事。

「公爵、舞姫を見る。」

オペラグラスを持つた公爵、後を向く。話す。喝采。執事が棧敷を去る。公爵が双眼鏡を覗く。

第六十六齣

別室。花。食堂への帷が閉ざされてゐる。公爵が卓の前に坐つてゐる。紙巻煙草。帷があく。

マントオに包まれた舞姫。笑ふ。公爵が舞姫の手に接吻する。舞姫がマントオを脱ぐ。印度の衣裳。帷が開かれる。音楽。二人が踊る。公爵がよるめく。舞姫は踊り続ける。公爵が死ぬ。舞姫が騒ぐ。死骸を抱へる。恐怖。逃走。給仕人がシャンパンを持つて来る。警報。客。公爵の胸に黒き斑點。叫喚——

「黒死病！」

卓や椅子がひつくり返る。みんな逃げる。

第六十七齣

夜。川。橋。舞姫が橋の上へ駈けて出て来て、衣裳を引きちぎつて、川の中へ投げ込む。

第六十八齣

「取引所にて。」

取引所の内部。方々に人の團り。大きな掲示板。電氣で出る數字——

「穀物……………一一三

石炭……………一七五

珈琲……………九七

羊毛……………一〇七

砂糖……………六〇】

銀行家はひつて来る。毛皮の外套、シルクハット。

「銀行家。」

丁寧な挨拶。仲買人。銀行家が注文をする。流言。不安。制服を着た給仕が群集を押し分けて来て、銀行家に何か耳打をする。数字が變る。

「相場低落。」

動搖。みんなが掲示板を指さす。数字が下がる。

第六十九齣

「警報！」

鐘樓。鐘が動く。ゆつくりと。段々早く。

第七十齣

取引所。書類が飛ぶ。暴落。立會中止。銀行家はその真ん中に立つてゐる。

第七十一齣

取引所前の廣場。石段。興奮した群集。巡查。仲買人が石段を駆け降りる。銀行家が出て来る。

第七十二齣

銀行家の顔。どつと群集を見詰めてゐる。突然、顔を撃つ——

第七十三齣

「或計畫！」

銀行家がゆつくり石段を降りて行く。

「金力」

群集が散る。銀行家はその中を悠々と歩く。

第七十四齣

川。後景——橋、町。川の上を衣裳が流れて来る。

第七十五齣

川。村。子供達が遊んでゐる。衣裳が流れて来る。子供達がそれを引き上げる。「死」が行商人になつて、馬に荷車を引かせて来る。子供達が衣裳を彼のところへ持つて来る。

第七十六齣

「村の歳の市。」

市場。メリイゴオランド。「死」が屋臺店やたいせにゐる。花嫁花婿が衣裳を買ふ。

第七十七齣

「婚禮。」

祭壇。婚禮の行列。新郎新婦。祭壇。牧師が二人の手を掴む。花嫁がよろめく。花婿が倒れる。一同癡立。

第七十八齣

市場。荒漠とした村。メリイゴオランドが寂しく残つてゐる。屋臺店に死人の山。

第七十九齣

「唯一人の子供、生き残る。」

白い著物を著た子供が寺から出て来て、ゆつくり市場の中を歩いて行く。

第三卷

第八十齣

「電話。」

銀行家の部屋。銀行家が電話機をとる。ハンドルを廻す。

第八十一齣

大臣室。大臣が受話機をとる。

第八十二齣

銀行家が話す。

第八十三齣

大臣が答へる。

第八十四齣

銀行家が新聞をとる。何か讀む。

第八十五齣

大臣が頷く。一疋の鼠が卓の上を走る。大臣が驚く。受話機を取りおとす。

第八十六齣

銀行家が訊く。

第八十七齣

大臣は動かない。頭を卓の上に載せてゐる。

第八十八齣

銀行家が烈しくハンドルを廻す。答がない。電話機を棄てる。毛皮の外套とシルクハットをとる。出かける。

第八十九齣

「発見者。」

屋根裏部屋。化學の機械。顕微鏡。発見者がプレパラートを光に透して見る。銀行家はひつて来る、話す。発見者がお辭儀をする。銀行家が坐る。機械を指さす。発見者が机から書物をとる。書物の題——

「黒死病の研究。」

銀行家が頷く。発見者が肩を縮める。部屋の中を指し示す——貧困。銀行家が手を伸ばして自分を指さす。発見者が話す。銀行家が衣兜から小切手帳を取り出し、小切手を書いて発見者に渡す——

「百萬マルク。」

発見者が跳り上がる。銀行家の手を掴む。銀行家が手を引つ込める——

「或條件の下に……」

銀行家と発見者が顔を見合ふ。銀行家が言ふ——

「この発見は私のものです！」

発見者が承諾する。

第九十齣

棺の列。

第九十一齣

黒い十文字のつけてある家。「死」が麵包屋になつてゐる。鈴を鳴らす。窓が開かれる。見えない

手が籠をおろす。「死」が麵包をその中へ入れる。籠が引き上げられる。

第九十二齣

「學生の夢。」

學生の下宿。學生が地圖を持つてはひつて来る。暖爐の側へ坐る。火の光。新聞を取つて讀

む――

「百萬マルクの獎勵金！ 黒死病治療法發見の爲に。」

部屋が暗くなる。學生が眠る。

「夢幻。」

白衣の子供がやつて来る。學生の肩を揺ぶる。學生が立ち上がる。夢遊病者のやうに。二人で
出かける。

第九十三齣

賭博場。賭博者。銀行家が賭ける。負ける。又賭ける。子供が學生を連れて来る。

第九十四齣

踊り場。踊り手。舞姫が踊る。子供が學生を連れて来る。

第九十五齣

病院。癡癡。瀕死の老人。病床にゐる娘。老人が起き上がつて、拳を振る、死ぬ。子供が學生
を連れて来る。

第九十六齣

墓地。合葬の墓。子供が學生を墓のところへ連れて来る。姿を消す。學生、自分の部屋に坐つ
てゐる、目を覺ます。

第九十七齣

「學生、民衆に語る。」

取引所の前の廣場。群集。石段の上に立つ學生。豫言者風の身振り。人々が黄金や寶石を投げ
棄てる。病院から娘が顔を出して、鬚を解いて、髪の毛を剪る。學生と娘が顔を見合ふ。

第九十八齣

取引所。

「銀行家の株券。」

銀行家が衣兜から書類を出す。買手。

「黒死病治療の血清。一株。一千マルク。
申込。」

第九十九齣

石段。學生と娘が手を取り合ふ。石段を降りる。

第四卷

第百齣

「黒き死。」

屋根。

「猫、病毒を傳播す。」

猫が屋根から屋根を飛び歩く。

第百一齣

「遺言状。」

門。町の柵。瀕死の人を載せた吊臺が門の前へ運ばれる。正服を着けた公證人が柵のところへ出て来る。瀕死の人が話す。公證人が書く。

第百二齣

「救済の道なし！」

寺院。跪く人々。

第百三齣

「研究を続ける發見者。」

大きな實驗室。發見者が鼠に種痘をする。銀行家のはひつて来る。發見者が試験管を指し示す。

第百四齣

「戀愛！」

學生の下宿。學生と娘がはひつて来る。接吻。學生が驚く。

第百五齣

娘の頸——黒い斑點。

第百六齣

學生の顔——斑點の凝視。

第七七齣

「黒死病！」

二人、抱き合ふ。

第七八齣

「銀行家の捕虜。」

實驗室。發見者が戸口へ行く。閉鎖。戸を揺ぶる。次ぎの戸口へ行く。同じく。突嗟にその理由が分かる。拳を振る。窓を開く。

第七九齣

門の前の歩哨。

第八十齣

學生の下宿。學生と戀人が失心してゐる。例の子供がはひつて来る。二人を揺ぶる。學生と娘、氣がつく。火の光。子供が先きへ立つ。學生と戀人が従ふ。

第八十一齣

實驗室。鼠。發見者は夢中になつて血液をとり、それを混ぜる。

第八十二齣

「最後の希望！」

實驗室の入口。歩哨。興奮した群集が上を見上げる。

第八十三齣

實驗室。發見者、混合物を火の上で燃やす。見本をとる。顕微鏡のところへ行く。覗く。両手を突き上げる——

「血清！」

窓を突きあけて、叫ぶ。

第八十四齣

歡呼する群集。空中に振られる腕。

第八十五齣

取引所。銀行家。雑沓。掲示板——

「血清株……二〇〇〇。」

祝賀の挨拶。手。

第一百十六齣

森。子供が先きに立つ。學生と戀人が従ふ。

第一百十七齣

實驗室。發見者。下男が新聞を持つて来る。發見者が讀む——

「大發見！ 發見者、治療法を公開すべし。」

發見者、満足して卓の上を見る——

第一百十八齣

黒い十文字の書いてある小さな瓶。

第一百十九齣

發見者が新聞を捨てて、雑誌を開く。急に何か思ひ出したやうに、立ち上がる。

第一百二十齣

舞姫の寫眞。印度の衣裳。

第一百二十一齣

催眠術にかかつたやうな發見者。長い凝視。戀愛。

第一百二十二齣

「學界の巨頭。」

大學。半圓形劇場のやうな講堂。下に手術臺。その前に安樂椅子。教授達が現れる。腰掛が一杯になる。銀行家が安樂椅子に坐る。發見者がはひつて来る。お辭儀をする。手術臺の後に立つ。白い布ふに包まれた黒死病患者が運び込まれる。右の手が見えてゐる。生氣せいきがない。蠟ろうで作つたやうである。運搬夫が患者を手術臺の上に置く。

「實驗。」

發見者が生命のない患者の手を指し示す。胸の衣兜から小さな瓶を取り出して、液を注射器にとる。不意に手を留めて、空を見詰める。

第一百二十三齣

舞姫の寫眞。印度の衣裳。

第一百二十四齣

發見者は心ここにあらぬ態で、患者の手を握む。

第二百二十五齣

生命のない患者の手。發見者の生き生きした手が注射器を刺し込む。注射する。

第二百二十六齣

發見者が突然手を放す。額を掴む。凝視する眼。

「黒死病！」

發見者が患者の上に倒れる。

第二百二十七齣

發見者の手。死の痙攣。手にした瓶を握り潰す。

第二百二十八齣

患者の手、生氣を帯びて来る。動く。

第二百二十九齣

聽講席。騷擾。銀行家が前へ突き進む。

「血清！」

銀行家が發見者を揺ぶる。その手を掴む。瓶が粉々になつて落ちる。

第三百十齣

銀行家の顔、眉を撃つ。

第三百十一齣

講堂。狂暴な逃走。床の上に倒れてゐる發見者。室内空虚。手術臺上の患者、身を起す。布を跳ねのける——「死」である。手術臺から發見者の死骸を踏んで降りて来る。戸口へ行く。

第三百十二齣

大學の前の廣場。白い布に包まれた「死」が出て来る。通行人が俯れ伏す。塀に縋りつく。

「死」がその側を通つて行く。

第三百十三齣

「恐慌。」

取引所。喧騒。仲買人が株券を裂いて、銀行家の顔に叩きつける。銀行家は両手を衣兜に入れて、ちつと前を見詰めてゐる。群集が迫つて来る。銀行家が拳銃を出す。みんな逃げる。

第三百十四齣

海。月。子供が森から出て来る。學生と戀人が従ふ。

第五卷

第三百三十五齣

「世界没落。」

荒漠とした町。主人のない家畜。

第三百三十六齣

毀れた窓。人のゐない家。

第三百三十七齣

「穴居の人。」

火の側にゐる人達。

「亂心。」

踊り跳ねてゐる人達。

第三百三十八齣

「幸福なる者の終り。」

海。月。天使になつた子供が両手を廣げる。翼つばさ。海の上を飛ぶ。學生と戀人がそれを見送る。抱かき合ふ。海の中へはひつて行く。

第三百三十九齣

「邂逅。」

街道。自動車に乗つてゐる銀行家。路上の舞姫。自動車が留とどまる。舞姫が笑ふ。自動車で乗る。

第四百十齣

「銀行家の別邸。」

石段。自動車が門をはひる。石段の上の紳士淑女。銀行家、舞姫を自動車からおろす。

第四百十一齣

「宴會。」

食卓。酒。

第四百十二齣

「意外の客。」

庭。鼠。

第四百三三齣

食卓。支配人が銀行家の側へ来て嗜く。銀行家が杯をひつくり返す。二人、出て行く。

第四百四四齣

窓。銀行家と支配人。石段の上の鼠。銀行家が拳固を振る。手を延ばして、圓を描く。支配人がお辭儀をする。窓が閉ざされる。

第四百四五齣

庭園。下男、材木を引きすつて来る。火をつける。

第四百四六齣

「人工の塔壁。」

塔。火が別邸の周囲で燃える。

第四百四七齣

「最後の人々。」

郊外。背景に別邸。地平線上の人の姿が幽霊のやうに駈け寄つて来て、火の中に飛び込む。

第四百四八齣

バルコン。折戸。宴會の客が出て来て、笑ふ。

第四百四九齣

「死の舞踊。」

假面舞踏會。舞姫が舞ふ。裸體。戸口を凝視する。戸があく。假面の人のはひつて来る。銀行家が威嚇する。假面の人が近づいて来る。銀行家が倒れる。舞姫が叫ぶ。假面の人が舞姫の手をとる。二人で舞ふ。假面の人が振り向く。一同凝立。假面の人が顔を現す。「死」である。

第四百五十齣

蝙蝠。

第四百五十一齣

猛火が別邸を包む。

— 終 —

『人間』の解説

「朝から夜中まで」の銀行出納係が巡禮なら、「人間」のアレクサンダアは救世主である。彼は墓の中から出て来て、自分を殺した者の罪を一身に負うて、その罪の償ひを果して、また墓の中へ歸るのである——これは基督である。

人が人を殺す。これは殺す者の罪か、殺される者の罪か。殺す者が殺されるのか、殺される者が殺すのか——アレクサンダアは法廷で叫んで言ふ。「人はみんな人殺しだ。」と。

この戯曲の時代は「今日」である。舞臺は「世界」である。人物は今日の世界の代表者である。社會の抽象である。箇性の集合ではない。民衆の蒸溜である。

自分の首のはひつた袋を——自分を殺した者の罪を——擔いで、アレクサンダアは「世界」へ出て行く……（第一幕第一場）

最初に彼の見たものは——まだ寺院を離れない内に彼の見たものは、恐怖の前に暴露した青年

に對する少女の戀の偽りであつた。(第二場)

カフェエへはひると、もう殺人事件が新聞を通して、給仕人と客との噂にのぼつてゐる。會話の交叉で、人間一人がロオストビイフ一つに比較せられる。しかも、それは三マアクと九十ブヘニツヒである。給仕人は行方の知れなかつたアレクサンダアが、ひよつこり又現れて來たのを吃驚する。(第三場)

アレクサンダアは酒場へはひつて、或酒飲みの相手になる。酒飲みは金を持つてゐなかつた。そこで、彼は給仕人になつて、その金の償ひをする。アレクサンダアの人類愛的行爲の第一の現れである。娼婦リツシが現れる。酒飲みが女を侮辱する。女が復讐を誓ふ。(第三場)

アレクサンダアが次ぎに現れるのは。賭博俱樂部である。貸元 (Banker) である。私は賭博用語と見て、假にかう譯して置いた。博徒の親分の謂である。併し、或は普通の用ひ方で、銀行員の意味であるかも知れぬ) がアレクサンダアに金を呉れる。そこで、彼も賭博の卓につく。初め「十三」といふ數で、貸元が勝つ。けれども、それからとは立て続けにアレクサンダアが勝つ。いつも「十三」といふ數で勝つのである。氣味悪く「十三」といふ數ばかりが続くのである。貸元が終に破産して、ピストル自殺をする。他の紳士達もみんな無一文になる。紳士達が自暴にな

つて卓を覆すと、貸元に自殺を強ひた覆面の人達が、紙幣を拾つて、みんなアレクサンダアの衣兜へ押し込んでしまふ。アレクサンダアは、なんにも言はずに出て行つてしまふ。覆面團は俱樂部を脅迫して、紳士達から手形を巻き上げる。(私が假に「賭博場の首領」と譯して置いた President は、後の法廷で「裁判長」に當る人と同一人物である。これは是非同じ譯語を使はなければならぬのだが、兩方に通ずる妥當な詞が思ひ浮ばないので、暫くこの儘にして置く。假に「賭博場の助手」と譯して置いた人物も、原語は唯 Heller とあるだけで、實は何の助手だか分からないのである)(第四場)

一日が過ぎた。明くる朝である。アレクサンダアは前のカフェエで給仕人として働いてゐる。例の酒飲みが、金もないのに、平氣で酒を飲んでゐる。近所の工場から職工達のはひつて來て、一緒に酒を飲みながらストライクを叫ぶ。酒の瓶が六本空になる。アレクサンダアと飲んだ時と同じ數である。勿論、酒飲みはその金を拂ふ事が出来ない。そこで、アレクサンダアがふと思ひついて、ゆうべ賭博場で衣兜に詰め込まれた金を、みんなそこへ出してしまふ。そして、「それは君のだ。」と言ふ。アレクサンダアは箇人の所有權を認めないのである。

ところが、その結果はどうなつたらう。職工達はその金を奪はうとする。酒飲みはそれを取ら

れまいとする。掴み合ひになつて、酒飲みが頭を割られる。工場の汽笛が鳴るので、職工達は目的を果さないで、出て行く。(第五場)

酒飲みが住む地下室である。酒飲みは頭に繻帯をしてゐる。酒飲みが金の事を考へてゐると、例の助手がはひつて来て、もう世界に戦争のなくなつた事や社會の共産組織になつた事などを説いて、手形を書かせる。酒飲みがハンケチを落とす。助手は身を屈めてそのハンケチを拾ふと、いきなりそれで酒飲みを絞める——酒飲みは持つてゐる金を奪はうとするのである。

三人の娼婦がどやどやはひつて来るので、助手は驚いて窓から飛び出してしまふ。酒飲みはアレクサンダーから貰つた金で、これらの娼婦から「金持の宮様」と呼ばれてゐるのである。だが、もうその「金持の宮様」も虫の息である。(第二幕第一場)

地下室の上の部屋には、例の戀する青年と少女が住んでゐる。少女は或豫感に恐怖してゐる。地下室で椅子の倒れる音がする。酒飲みが死んだのである。階下へ駆け降りた青年は、やがて金を掴んで歸つて来る。金錢を得た青年は窓を開いて、廣い世界の生活を生きようとする。少女は青年の心が自分を離れて行くのを感じる。(第二場)

女卜者の家である。青年と少女が各自の運命の豫知を求めてゐる。女卜者が骨牌を読む——青

年と少女の間に、一人の女がはひつて来る。青年がそれに心を奪はれる。その結果は涙だ……

妖婦リッシが現れて、少女の隣の明いた椅子に腰をかける。誰も氣づかない。

女卜者が「死だ。」と叫ぶ時、青年とリッシが目を見合ふ。豫言はもう行はれ始めたのである。(第三場)

醫者の家の應接間である。青年がはひつて来る。青年はもうリッシから病を獲たのである。醫者が出て来て、青年の血を取る。青年は目の前の壁を見詰めて、その壁に舟や子供や城などの幻影を見る……

梅毒だといふ醫者の診断を聞いて、青年が昏倒する。青年は左手の小部屋へ運ばれて、長椅子の上に寝かされる。

今度は、少女がはひつて来る。少女は青年の種を宿してゐるのである。そして、醫者に胎兒の始末をして呉れと頼むのである。

醫者は少女の美しいのを見て、少女の苦しい境遇を利用しようとする。少女は無理強ひに右手の小部屋へ運ばれる。燈が消される。

左の小部屋で息を吹き返した青年は、なんにも知らずに落日に向つて腕をひろげる。そして、

「朝日。」だと叫ぶ。

醫者に凌辱せられた少女は髪の毛を振り亂して、右手の小部屋から逃げて来る。解剖刀で血管を切る。死を決したのである。

そこへ、暫く顔を見せなかつたアレクサンダアが袋を擔いで現れる。そして、少女と青年を救ひ出す——青年はもう骸骨になつてゐるのである。(第四場)

アレクサンダアが、青年と少女を連れて、或オペラの棧敷へ来てゐる。少女が胎兒の蠢動を感じる。青年は永遠の近づくのを感じる……

隣の棧敷へ醫者がはひつて来て、青年に診察料の十マアクを請求する。青年が醫者に紙幣を投げつける。リッシが醫者の棧敷へはひつて来て、紙幣を盗む。今度は醫者がリッシに迷はされてゐるのである。

激しく喇叭の音が響くと、青年が棧敷から轉げ落ちる。アレクサンダアが、「復活だ。」と呼ぶ。(第五場)

街路である。正面の奥に窓のある家がある。中段にバルコンがあつて、下がカフェエになつてゐる。バルコンのあるところは醫者と妖婦リッシの住居で、下のカフェエには例の年とつた給仕

人が勤めてゐる。

廣告塔がある。それに赤いポスタアがはつてある。ポスタアには何の外題か知らぬが「殺人犯」と大きく書いてある。廣告塔に向ひ合つて、乞食が一人坐つてゐる。乞食は手風琴で、前のオペラで聞いた曲を弾いてゐる。

例の助手が右手の卓についてゐる。醫者が奥の家から出て来て、助手の隣に腰をかける。

アレクサンダアが袋を擔いで出て来て、ポスタアを見上げて、それから左手の卓に腰をかける。

啞が四五人出て来て、中央の卓を圍む。

そこへアガアテといふ十四になる娘がマツチを賣りに来る。助手が追ひのける。醫者が笑ふ。

ところが、啞達が金をやる。アレクサンダアがアガアテを憐んで抱く。

アガアテが自分達は食べられないと言ふと、醫者が紙幣を出して、「おれ達は財産を持つてゐる。」と言ふ。賭博場でアレクサンダアの衣兜に突つ込まれた紙幣である——それが酒飲みの手へ渡つて——青年の手を経て——醫者の顔へ投げつけられたのである。

助手は透かさず手形を出して——多分、例の酒飲みに書かせた手形である——「買つて呉れますか。」と言ふ。醫者は紙幣を衣兜へ突つ込んで、「もうお産の時間だ。」と言つて立ち上がる。

醫者が去ると、助手があとを追ふ。

アガアテは家に病氣で寝てゐる母を思ひ出して、アレクサンダアと一緒に來て呉れと頼む。(第三幕第一場)

アガアテの住む屋根裏部屋である。アガアテの母が死にかけてゐる。母は臨終の幻覺で、遠く旅にでも行くつもりでゐる。アレクサンダアは、母の命令する通りに動く。まるで息子のやうである。

母が息を引き取ると、突然アガアテの父がアレクサンダアに向つて叫ぶ——「お前は誰だ。」すると、アレクサンダアが答へる——「おれはおれを探してゐるのだ。」(第二場)

例の醫者が管理してゐる病院である。嘗て酒飲みの家で見た三人の娼婦(テアとギルダとレナ)が、みんな妊娠で入院してゐる。

愈々産の近づいた少女が、踴躍としてはひつて來る。醫者の顔を見ると、思はず怒を發して「けだもの。」と叫ぶ。醫者は構はずクロロフォルムのマスクを冠せて、少女を痲酔に陥れると、運搬車で手術室へ運び入れる。やがて、手術室で鉗子か何かの床の上に落ちる音がする。醫者が出て來て、血だらけの手を洗ふ。(第三場)

再び、以前の街路である。カフェエの中央の卓には、まだ啞達が坐つてゐる。乞食も相變らず手風琴を弾いてゐる。

アガアテの母の葬式の行列が出て來る。死骸はむき出しの儘、屋根裏部屋にあつた卓の上に載せられて來るのである。父とアガアテが附いて來る。そのあとから、アレクサンダアが例の袋を擔いで附いて來る。

突然、借金取が大勢出て來て、葬列の道を遮ぎる。「家賃を拂へ。」と叫び、「麵包の代を拂へ。」と罵りながら、死骸に襲ひかかつて、終に死人を裸にしてしまふ。

アレクサンダアは自分の著物を裂いて、死骸を包み、そして、死骸を抱き上げる。啞達が往來に墓を掘つて、アガアテの母を埋める。アガアテがアレクサンダアの前に跪いて、その手に接吻する。

新聞賣子が出て來て、「さあ、さあ、人殺しの足がついた——首は袋の中にある。」と叫ぶ。(第四場)

既に子を生んだ少女が、搖籠をゆすりながら、氣味の悪い子守歌を唄つてゐる——「……………今が一番好い時だ。あとちや中々かういかぬ」と。(第五場)

アガアテがアレクサンダアに對して、戀を感じ始める。アレクサンダアが、それを夢に見る。併し、目が覺めると、直ぐ又彼は自分の背負つてゐる袋のことを思ひ出す。贖罪と戀との交錯。(第四幕第一場)

醫者の家の客間である。醫者の肉體はリツシの爲にもう崩れかけてゐる。自分で自分にモルヒネの注射をする。齒がこぼれ落ちる。リツシは醫者を足蹴にする程嫌つてゐる。

また助手がはひつて来る。いきなり注射器を醫者の頭に突き刺す。醫者の衣兜から紙幣を奪ひ取る。そして、死骸を窓から捨てる。(第二場)

アレクサンダアが袋の中から首を出して、その首と話をする。アレクサンダアが「お前はおれの首だ。」と言ふと、首が「お前はおれの體だ。」と言ふ、首が「殺した奴は生きてゐる。」と言ふと、アレクサンダアが「あいつはもう許された。おれがあいつの代りに生きてゐるのだ。」と言ふ。

途端に、例の年とつた給仕人が巡査を連れて来る。アレクサンダアが捕縛される。(第三場)

陪審裁判所である。今まで現れた人物が、殆んど總て出てゐる——カフェエの主人、賭博俱樂部の紳士達、三人の娼婦、乞食、新聞賣子、オペラの女給、アガアテ。證人として老給仕人。被

告としてアレクサンダア。

持つて歩いてゐる首が證據である。アレクサンダアは簡単に死刑を宣告される。アレクサンダアは「おれが殺されたのだ。これはおれの首だ。」と言ふ。傍聽席に哄笑が起る。「だが、おれは贖罪する。」と言つて、アレクサンダアは潔く刑を受ける。みんなアレクサンダアを狂人だと思ふ。

(第四場)

再び女卜者の家である。子供を抱へて飢餓に襲はれてゐる少女と、少女を不幸にした最初の敵であるリツシとが同時に來てゐる。

リツシが最初に切つた骨牌は「憎惡」を豫言する。次ぎにリツシが一枚抜いた骨牌は或者の既に來てゐる事を告げる。途端に、少女がナイフを抜いて、リツシを刺す。リツシは少女を絞め殺す。

(第五幕第一場)

癲狂院である。入院患者は悉く獸の形をし、匍伏してゐる。金錢の奴隸であつた例の助手が王座についてゐる。アレクサンダアがはひつて來て、助手の前に匍伏する。(第二場)

前の街路である。いつの間にか又ここへ來てゐたアレクサンダアが監獄へ連れて行かれる。密告者の老給仕人が自ら縊れて死ぬ。(第三場)

アレクサンダアが監獄で鎖につながれてゐる。アガアテがそつとはひつて来て、アレクサンダアの鎖を解く。そして自分自身を縛る。

絞首臺の廻りに裁判長や検事達の立つてゐるのが見えるアガアテが笑ふ。天國が現れて、塔の上から讚美歌が聞えて来る。ファウスト第一部の最後の場面である。救ひと浄めの完成である。

(第四場)

長い旅を終へてアレクサンダアが又自分の墓へ歸つて来る。袋の中にはもう首がない。罪は償はれたのである。

人殺しが両手をひろげて、「おれは愛す。」と叫ぶ。太陽が昇る。(第五場)

この戯曲が行爲の戯曲であつて、言語の戯曲でないことは、本文を一目見れば、誰にも分かることである。「戯曲は行爲なり」といふ定義が若し真なら、この戯曲は實に戯曲の頂點を盡したものである。この戯曲に於いては、「ト」書が臺詞より大きな字で組まなければならないのである。

作者ハアゼンクレエフェルは現今の獨逸で最も能辯な詩人の一人である。彼は自分の詩集の一

つに「政治的詩人」といふ題をつけてゐる。巻頭の寫眞は彼が演壇に立つて熱辯を振つてゐるところを見せてゐる。彼の最初の戯曲「息子」は獨白的にも對話的にも、能辯過ぎる程能辯である。それ程能辯な詩人が、なぜこの戯曲では、こんなに言語を儉約したのであらうか。多くは唯一語の名詞か動詞である。長くても、助動詞を合せて、三四語を出ないのが多い。例外は唯女卜者の四行の韻文と少女の子守歌とのみである。作者は徒に奇を好んだのであらうか。

私はさうは思はない。作者の創作動機が必然的にこの戯曲にこの形式を取らせたのである。作者は永遠の問題を永遠の詞のみで書かうとしたのである。永遠の詞に「冗漫」は許されない。許されるのは唯「要約」のみである。賭博者は「銀行。」と叫ぶ。職工が「ストライク」と言ふ。娼婦が「藤色絹。」と言ふ。裁判官が「死刑。」と言ふ。「金錢」といふ詞、「資本」といふ詞、「奴隸」といふ詞、悉くこれ原始語 *Urtaut* である。憧憬する者が手を擡げて、「愛する。」と言ふ。疑ふ者が、「おれは誰だ。」と言ふ。求める者が、「おれはおれを求めてゐるのだ。」と言ふ。萬人の罪を負うた者が、「おれは贖罪する。」と言ふ。悉くこれ永遠の詞である。

戯曲「人間」は永遠の詞を持った繪巻物である。Bilderserie である。場景の急速な變化は表現派詩人の特色ではあるが、この戯曲の作者にあつては、殊にそれが著しい。「人間」の前に「ア

ンチゴオネ』がある。併し、『アンチゴオネ』にはまだ人間の詞らしい詞が澤山にある。だが、『民衆』の詞に希臘のコオラスを乗り越えた永遠の詞が既に讀まれる、『人間』の後に出了た『黒死病』に至つては、もう詞が全然ない。Ein Film である。映畫劇の臺本である。ベルンハルト、チエボルトがハアゼンクレエフェルの爲に「映畫劇への道程」Weg zum Kino を説いたのも決して偶然ではない。

戯曲『人間』が吾人の前に展開する世界は、實に血腥い世界である。先づ最初に鳴り響くモチイフが人間の首である。酒飲みが金を持つてゐる爲に殺される。アガアテの母は金がない爲に病死する。醫者も金の爲に注射器で頭を刺される。青年は金を得た爲に梅毒で身を滅ぼす。リツシと少女は憎惡の爲に殺し合ふ。老給仕人は金が欲しさに罪人ならぬ罪人を密告して自ら縊れ死ぬ——いづれも金銭の爲である。金銭の爲に總てが殺し合ふのである。併し、これが世界である。實際、世界はこれなのである。誰がそれを否定出來よう。

では、この世界に救ひはないのだらうか。作者ハアゼンクレエフェルは自らそれを救はうとするのである。それが偉大な名の持主アレクサンダアである。萬人の罪の賠償者である。

だが、アレクサンダアは既に現世の人ではない。そこでアレクサンダアの贖罪を更に現世で擔

はうとする者が現れて來る。それが少女アガアテである。アガアテは超グレエトヒエンである。超マリア・マグダレエナである。作者は正しくアガアテを求めてゐるのである。仰望してゐるのである。憧憬してゐるのである。

先圖藝術叢書
第十編 · 人 間 · アハゼンクレエフエル作

大正十三年六月二十日印刷
大正十三年六月二十五日發行

・定價・ 金 六 拾 錢

著 者 小 山 内 薫

發 行 者 東京市神田區今川小路一丁目四番地
福 岡 益 雄

印 刷 者 東京市日本橋區蠣殼町一丁目四番地
鈴 木 清 三

印 刷 所 東京市日本橋區蠣殼町一丁目四番地
金 星 堂 印 刷 部



發 行 所 · 東京市神田區今川小路一丁目四番地 · 金星堂
振替口座東京三三二八番

◇ 書叢術藝驅先 ◇

◇ 第一編 海

獨逸表現派戯曲中の逸品である。戦争の惨害と狂氣と盲目とを描き、人間と人間との間にあるべきものを探究する痛烈悲壯なる一幕物である。最近土方與志氏の手にて築地小劇場に上演され好評を博した。

(戯曲)

ゲエリントン 作
伊藤武雄 譯

◇ 第二編 ロボット

資本主義の病的な發達が人造の労働者(ロボット)を造り出し、終にはロボットの爲に全世界を占領され、其處に再び新しい世界の創造されるといふ深刻皮肉な諷刺劇である。最近築地小劇場に上演された。

(戯曲)

カレルチャペック 作
鈴木善太郎 譯

◇ 第三編 電氣人形

電氣仕掛の人形を傍らに侍らせて怪しき戀の陶酔に耽り、不倫なる女の心理に潜り入つて、自在にそれを嘲弄する伊太利未來派作家の代表的戯曲である。

(戯曲)

マリネツツイ 作
神原泰 譯

◇ 第四編 休みの日

休みの日に會した二人の老友が、昔語りになる好箇の一幕物喜劇であつて、即ちいたり離れたりする二人の心を巧みに點出してゐる。作者は佛蘭西劇壇の新人譯は本邦劇場の第一人者。築地小劇場の上演臺本である。

(戯曲)

エミール・マゾ 作
小山内薫 譯

◇ 第五編 落葉の如く

亡び行く家に住む健氣なる處女を中心に、心弱き父、浮薄なる母、無頼の兄弟等を點出し、落葉の如く散り行く頼みなき人の姿を描いた涙ぐましい四幕物である。

(戯曲)

ジュゼツベ・ジアカソー 作
長沼重隆 譯

◇ 書叢術藝驅先 ◇

◇ 第六編 皇帝ジョーンス

大山師の黒人ジョーンスが皇帝の椅子を追はれてから捕縛されるまでの數時間中に起る恐怖の心理を八場に掲げた驚嘆すべき表現派戯曲である。

(戯曲)

ユウチン・オネイル 作
本田滿津二 譯

◇ 第七編 群衆

獨逸表現派の代表的戯曲である。「二十世紀社會革命劇」と傍註されてゐる。何時までも覺醒を知らない雷動と盲動とを事とする群衆に向つて、人間に歸れ、人間に歸れと絶叫せる、全篇血の如き叫びを以て充ちた熱烈なる劇である。

(戯曲)

エルンスト・トルレル 作
伊藤武雄 譯

◇ 第八編 猿

米國一の藝術家オネイルの作品中「皇帝ジョーンス」と共に傑作中の傑作とされた「ヘヤリー・エープ」で、猿の如き水夫の生活を描いた深刻なる戯曲。

(戯曲)

ユウチン・オネイル 作
鈴木善太郎 譯

◇ 第九編 六人の登場人物

詳しくは「作者を探してゐる六人の登場人物」——未完結のある喜劇」といふ。如何に面白ものであるかはこれによつても知られる。英文戯シヨウは本書を評して「何時の時代、何れの國民にも最もよい戯曲だ」といつてゐる。

(戯曲)

ルイチ・ピランテロ 作
本田滿津二 譯

◇ 第十一編 黒い假面

新象徴主義の巨匠アンドレーフの作品中、象徴的技巧を最も奔放に用いた一種の假面劇である。心算い主人公の假裝舞臺會の夜に起れる恐怖すべき怪奇な事件を描いたイッピドフの尤なるものである。

(戯曲)

アンドレーフ 作
米川正夫 譯

各册四六判假裝美本 定價六十錢 送料六錢

夜の宿 (ゴルキイ作)

小山内 薫氏著

定價八十五錢

郵送料六錢

第一幕	木賃宿地下室畫の場
第二幕	木賃宿地下室夜の場
第三幕	木賃宿横手明き地の場
第四幕	數月後の木賃宿地下室の場

近代露西亞の文豪ゴルキイの數多い戯曲中最も傑出せりと言はれる「どん底」の全譯である。ゴルキイは人も知る身に一丁字なき勞働者より身を立て、社會のどん底に放浪する無頼漢の中から、涙ぐましい神の存在を見出した人で、本篇の如きは木賃宿の地下室にうごめける十數人が醸成する美しい魂の巡禮を説いたものである。譯者は先に左團次等の自由劇場幕上げの時に自ら手がけて江湖の喝采を博し、後數回上演し、近時又築地小劇場に於いては異狀なる好評を収めたるもの、全て本書を臺本とされた。ともあれ近代文藝の精神に接せんとするもの、一度は必ず讀まねばならぬ作品であることを附言したい。

539
26

539
26

終